

昭和七年日記

—Note Book—

Made of Paper.  
Specially Prepared in Japan.

夜光雲 8

---

1897. 7. 12

---

田中克己

---

上  
保光  
雲  
卷八

田  
中  
克  
己

一九三二年七月十七日

昭和七年

七月十七日

一平紙

つれなききりのころをたまたまの御文待ちうめさすりの言の田を鏡の末は  
いまは<sup>す</sup>耐ふべきにあらずと思ふに下りたも永く一たるはさうとむと思ふと  
ころのあればこそ、この<sup>う</sup>言を果せばやむと先命死んぬべし、なほし  
くらくしもおんかみ

くらくわいなくと昔や得むわなうが<sup>わ</sup>の<sup>こ</sup>も<sup>さ</sup>思ひすまし  
はななるよそぶと<sup>さ</sup>のころたたりと<sup>さ</sup>と<sup>さ</sup>ともしまみつれな<sup>さ</sup>  
いつまじかふも<sup>さ</sup>のつゆのさうさうすかほさくいきむわな<sup>さ</sup>ころか  
はなはれし<sup>し</sup>思ひ<sup>し</sup>さ<sup>し</sup>下<sup>し</sup>床<sup>し</sup>うか<sup>し</sup>お<sup>し</sup>は<sup>し</sup>や<sup>し</sup>せ<sup>し</sup>も<sup>し</sup>もの<sup>し</sup>  
鈴<sup>さ</sup>下<sup>さ</sup>足<sup>さ</sup>ニ<sup>さ</sup>ハ<sup>さ</sup>欠<sup>さ</sup>読<sup>さ</sup>ひ<sup>さ</sup>び<sup>さ</sup>め<sup>さ</sup>ます

り<sup>り</sup>の<sup>り</sup>た<sup>り</sup>い<sup>り</sup>と<sup>り</sup>なる<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>ゆ<sup>り</sup>思<sup>り</sup>ん<sup>り</sup>や<sup>り</sup>せ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>さ<sup>り</sup>る<sup>り</sup>子<sup>り</sup>を<sup>り</sup>わ<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>は<sup>り</sup>ゆ<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ん  
かほ<sup>か</sup>と<sup>か</sup>ん<sup>か</sup>か<sup>か</sup>の<sup>か</sup>思<sup>か</sup>淵<sup>か</sup>み<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>つ<sup>か</sup>水<sup>か</sup>を<sup>か</sup>き<sup>か</sup>の<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>な<sup>か</sup>の<sup>か</sup>いろ<sup>か</sup>と  
き<sup>き</sup>み<sup>き</sup>こ<sup>き</sup>い<sup>き</sup>し<sup>き</sup>こ<sup>き</sup>ふ<sup>き</sup>し<sup>き</sup>と<sup>き</sup>う<sup>き</sup>ら<sup>き</sup>ん<sup>き</sup>を<sup>き</sup>ば<sup>き</sup>き<sup>き</sup>み<sup>き</sup>お<sup>き</sup>と<sup>き</sup>こ<sup>き</sup>し<sup>き</sup>と<sup>き</sup>あ<sup>き</sup>は<sup>き</sup>れ<sup>き</sup>ま<sup>き</sup>  
欠<sup>く</sup>の<sup>く</sup>山<sup>く</sup>の<sup>く</sup>答<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>言<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>も<sup>く</sup>な<sup>く</sup>ほ<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>つ<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>か<sup>く</sup>こ<sup>く</sup>ろ<sup>く</sup>な<sup>く</sup>れ<sup>く</sup>ほ<sup>く</sup>ん<sup>く</sup>は<sup>く</sup>い<sup>く</sup>で<sup>く</sup>ね<sup>く</sup>い<sup>く</sup>

一及<sup>一</sup>藤<sup>一</sup>の<sup>一</sup>名<sup>一</sup>は<sup>一</sup>保<sup>一</sup>太<sup>一</sup>か

七月十八日

は<sup>は</sup>わ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>こ<sup>は</sup>る<sup>は</sup>  
能<sup>能</sup>平<sup>平</sup>也<sup>也</sup>

一枚一枚わたしのあくる<sup>は</sup>月<sup>月</sup>牌<sup>牌</sup>の<sup>の</sup>わた<sup>の</sup>し<sup>の</sup>は<sup>の</sup>色<sup>の</sup>研<sup>の</sup>磨<sup>の</sup>の<sup>の</sup>後<sup>の</sup>は<sup>の</sup>女<sup>の</sup>を<sup>の</sup>欠<sup>の</sup>  
あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>近<sup>の</sup>い<sup>の</sup>ね<sup>の</sup>と<sup>の</sup>な<sup>の</sup>は<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>右<sup>の</sup>も<sup>の</sup>夜<sup>の</sup>鳴<sup>の</sup>く<sup>の</sup>鳥<sup>の</sup>を<sup>の</sup>南<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>  
ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>か

ひるもの後んわ長しはしんしんと鳴く蝉を聞くわ長しの中身には  
ま執拗を耳鳴りである。わ長しは子供の頃の氷ねいんを水  
を得て

極此の心とはけおしわ身を高くわ長しを嘲る妻長。わ長しは  
あり得る夜か妻長あるをわ長しは豊たしてある。わ長しはは事  
を事さ、やかこ解りする。紙片はうは空に向く舞ひ上り。うは  
ははに流れつある長

わ長しはあのこととを長のは十人の秋である。空に旗が流れ地  
に  
比喩か流れた十人の秋である  
(廿九)

わ長しはどちらの男にわけわはる。ゆるい所を長とまといは  
な御極らない顔をした。ほいとてははわわはわわと妻うす  
といふぬか。わ長しはよ木の妻ゆるとをまをこよといふ。わ長しは  
つしヒリヒリといふ言葉をあの御な顔とわわはなる。二の田力をカ  
はしは白くして一しと妻長が、この男の尻するは団の意気はここの田力  
に御であるらしい。わ長しははるの男の尻を下してある。こゝろをまいた  
思ふつた。親の細いことである。それは死を後たこととする。妻、思ふ  
思はせ長  
(廿六)

女の  
けおし手は来不。困いの事はををいそげである。わ長しはあのことか。あの女の  
やばらうの性質は私をうたしからせたい。まをないのわらう。疑いをもわ



日下にて 寒く 暖計の 嚙血した わたしは 水鏡に 晴茶を 飲へる。 極北の鳥

甲斐 信濃の 歌 訂正

夏草は 紅甘草は 光りぬぬ をとめ わる旅 ゆくわんは (立川)

いさふかくいまたしほまめ月見草 荒れし 碓の ざこに 咲くも (豊田)

「夏草のくもりなるるる 気配あり 紫陽花の 枝に びと 影すまぬ (八王子)

十休の 隊道 せやく 流し由なると 汽車 かく かくの 夏 枯草の けさ (浅川)

しめやかな 杉の 木の 内んま 降りぬ まるるを 鳥も 啼ひてしけり

嶺し 峰の はちまひ 起る 夏の 雲みつ おもは 正とめ をはしき (甲斐又鳥澤)

まかなしくお女(ま)ぢぢのをとめ子と思いつつ 来ぬ 甲斐えの 使路 (五月)

あはれあはれ 流離の 二ころ 中を 水は 空に ありて 移る 山河 (初狩)

けけん山見<sup>げ</sup>とよ甲斐の 町しづかにまけは 蝉しき 鳴りおぬ (まよ)

信さう館の あとを 乱れ 啼く 夏草の 花も 見むとおも (や)

あまの ぼくもぬしあうて 甲斐 駒の すとへる 次せの 牛は 女なしも (白野まら)

大南天ん なつとぬの せしに ぢぢまさん 夜は 水わたる 峰に 雨の ありき

こころしこころし 甲斐の 大峰に けかやばしとの けりつつ つまこより (十淵澤)

なつみしきむとぬるくの 東へい 官田士 晴々ましまし 誰ん くらふき

山 駒<sup>り</sup>に 汽車と きたまを 啼かして せきしうぐぬすて (も) なましまものて (春柳)

なみかよるあ 運草の 峰の 八の 岳の おもとの くらわぬひる 大けぬ

大 遠天の 湖の みつ ちえりたるこ 信濃の 茅かやめかき (高原)

あえわつつか 汽車は びまゆくとえは くるしきこころを かくも あれいぬ

(原尾)

この驛の横外は落世不取のまばら甚まいちさると虫の啼くこゝろなり  
なまかつり驛に乳母抱むせしめりぬすなはる汽車は静まぬけり  
雨さつり瀟々たるやうに言を井のくわりにを集めたるけむ(静まぬ)

我しんあめりやまむりあうんけり 松を木はおよひこのとほそそ  
食うまき山内りなを地<sup>の</sup>いこゝえは草を掃き母と地なりし  
ゆあつみしなうこんしおちぬしかたきさるまををけはなとせむ  
く木そのは見えぬ<sup>し</sup>ぬふいして走りぬる家はあしをけいひとせむ  
いとこいしこいしこふかむ病木しかかろむひまはゆめいんたんとぞ

川 雲濃津

X

記憶のせりりん 時肉の露をよる<sup>し</sup>天<sup>ま</sup>主<sup>ぬ</sup>領<sup>ち</sup>つ<sup>ま</sup>な<sup>な</sup> 母を<sup>あ</sup>ん<sup>ま</sup>わ<sup>ら</sup>す  
はこゝ魚の如き目もついに刻木は わかたはまのものと云ふゆゑなり

七月二十日の

杉浦二一印

蠅<sup>は</sup>こ<sup>し</sup>あ<sup>つ</sup>ま<sup>る</sup>厨<sup>の</sup>は<sup>つ</sup>た<sup>い</sup>粉

阿<sup>は</sup>は<sup>は</sup>漢<sup>の</sup>て<sup>い</sup>の<sup>わ</sup>の<sup>く</sup>も<sup>し</sup>い<sup>し</sup>え<sup>よ</sup>

はな唄

かぢくまの 秋に<sup>い</sup>る<sup>ま</sup>の<sup>川</sup>か<sup>た</sup>ら<sup>か</sup>ち<sup>に</sup>こ<sup>ゆ</sup>け<sup>は</sup> 妻<sup>を</sup>こ<sup>し</sup>し<sup>し</sup> 牡鹿<sup>の</sup>啼<sup>く</sup>も<sup>ま</sup>遠<sup>か</sup>ら<sup>じ</sup>  
かし、

狐<sup>の</sup> 諏訪<sup>の</sup> 湖 風<sup>は</sup>け<sup>は</sup> 白波<sup>さ</sup>か<sup>く</sup> 沖<sup>の</sup> 辺<sup>り</sup> 白帆<sup>は</sup>夫<sup>の</sup> <sup>か</sup>ち<sup>と</sup>り<sup>ま</sup>  
せる。

ゆ<sup>り</sup>て<sup>は</sup> 柳<sup>の</sup> 上<sup>の</sup> 板<sup>の</sup> 舟<sup>の</sup> し<sup>ら</sup>や<sup>ま</sup>り<sup>立</sup>ち<sup>な</sup>る<sup>空</sup> <sup>は</sup>女<sup>は</sup>女<sup>の</sup> 世<sup>の</sup> 夫<sup>の</sup>







二七六

五月會、西の草花、ぬきまの露、たのこゝろ、さし、しき、

N.E

いとつまと浮る立ちたり あまの川  
あまの川に夜気の流るる 相みせて  
いとつゆの 相手うたてき 晝の月  
友とつゆのいとつゆ

二七七

肥下も仙石に向ふ

蝶や草花を

愛するにままして 愛したいと世と  
か年すも七ころん 再び會ふは

さて何のなきまといつづら 才をばあふと

あらしの火

まちと世 へ出るをいふあすへそ

うらあくへきこふあふわは

うらあけえむかふ 身にあらふとば

夏草やひととらまるる 会の花

まの田つらき 風の跡 なる 野々宮や

紅あまつなかと おたるはこの 春の

風やば ぬかんとつらき 雲の 峰

三十一 ちね M. ち

あるさこの河内國を青田風くうけきさまいかわこわたり  
来り酒のみあはみしわな顔叶~~つ~~ほほやううしきをどめならけは  
そのあしちきみかたんばせおもい欠らうとこぬれなきはあはわたりまし

わたしの胸をばらさうて

あなちんんせるといふたうのいすか

わたしの胸は二つぢです

思ふあなちと

契つちあの子と

おちうの鳥かもつ木あひ

花園の葉のササと撫子のねでせー

X

あなちたしは何て馬鹿なごせー

あなちとろくさまはしたこしなる

あなちの顔をしるさうに何なるかといふごせー

あなちをさするといふ(た)義理ごせー

あなちは僕なんの思ひもぬる木ま

(きつとせうていごいぬい)

ニナアア早の持概ぶ

ニナアア早の本恒なごす

わたしはあなちのおしなげと

しつと抱らし

あなちの御城の禮のいまい生望はしますまい

二つの阿呆は、<sup>しあはせ</sup>去々落す

一は阿呆に似合ひます。

ああ阿呆のあひ。

阿呆のあひをこゝろする世紀。

×

いゝえ、阿呆は先まてあらまき

わたしは何は、何ひもやはら恥はなごころひす。

わたしはこの世紀の焦燥を感じるひす

わたしは自分いひあるひ、焦燥をな成り脱棄してなます

たけと脱棄しなまき

なまかわたしとすとすちのあひもたけなまし

なあ阿呆いし、あひのなまき世紀。

樹影のうら世紀。

あましこの世紀。

×

わたしは、道徳のなまきをなまき

白粉もほらまき。

眼のあひん、紅をなし、頬を描き

髪をなまきより、鼻をこころうけ。

なまきなわうをはめ

雑の啼き、声しなまき

(幸せと、わたしはなまき、なまきのひす)

わたしのおとけ、なまき、なまきのひす

あなたを待たさるる報いは大まいらう。

わたしを苦しめたあなたを

わたしは鞭うち。

その情状をいましては

他人にはいましてはあなたと望みつゝ

わたしはあなたに従順を要わします。

x

あなたに敵は七怒は百言のあまら

あなたにさしげち討たれ一人を殺す。

あなたの唇に泣いたをも汚辱してせよ

あなたを笑つてさう。

わたしは人いやさしくなりました

わたしはあなたを待ちました

お力かせすいたい口をあけて

あなたは泳ぎまはるわ魚でない

あなたの中いひまにかしまたず

わたしは刺針いしてついで

じろくいけとまたたのんいつた

いしあなたを思ひ出しては

わたしは無常様をあむけります

あなたに所注わたしは刺針(おま)をさす

手をとる ~~金~~ 金 おまた 金 おま 金 おま 金 おま

いしをさす せい せい せい せい せい せい せい

ゆき...  
は...

一 三子君来る

Mlle M.

ゆくかゆにじんく蟬は鳴き止まず夕陽黄いろき樟の栴い。

槐の花おほち散りて朝夕い涼しとおほゆ厚あとのへぬ。

一葉ゆらぐ風涼しげばをとめあもひ女すけを三三保うてをらむ。  
つみかたのぬ

やうまらんいでゆきぬとも物念ひなと絶えせあふ  
ゆかたのぬ

夕陽ものかきをたは何の葉も枯れててしく思ひ散り来。

ゆくかたん黄なる地平を視つるればさみかかさるもよよ来  
くるる

死にゆきしとはせあなれ夕雲の紅くくさける空をなみあむ。

金蓮花に永きおぼろの枯れにけりわかこいすもむときをしるしん。

青雲のゆくふしつむる時長ははるけききやんニニろユエよも。

祖文を父はらんか 僕は父をいんか。 僕の家のて井重を

いそまの蛇の遠いことを僕は知つてゐる。 白い蛇だと

いそかある。 わたしは蛇を憎む。 古い輪廻をいくか。

夕陽か村のはみ々の白壁を紅く輝かした。 田の風はとく青か。

わたしは知をばつす。 白いシャワンの夕陽をあてるたぬい。 わたし

の胸は直ぐ血しらす。 わたしは静みの鉛をぬける。 もとを静

かに血は流れたつげ。 蝶。 わたしは口も血を吐く。

x

わたしは庭の楠の梢のぼろ。栗白風の標いわたしの眼はさる。わたしは  
喧嘩して西方をみる。遠くの天守閣、鷲尾は金色也。巻の  
叫喚かわたしを立派識下へ引戻す。わたしは橋の下へ降り立つとき下  
駄の片方が裏向いてゐるのを疑ふする。わたしは鉄屋の世の海  
へる。

x  
夕立ち前の池にわたしは影を奪す。わたしの影はメウサの標に  
乱れてゐる。電閃を世深に受取る。今魚が標と松の海の区別を  
わたしは知つてゐる。

x  
夜深くを位跡鳥か鶴々と啼いて飛んた。  
嵐はとくそう来をいしてつた。  
遠く汽車の過りもた。

わたしの思ふよりは遠く海へ行く油をみる。  
波の音は平野の真中まで本々ない。  
五位の鳥の啼かく本林は暗い巨きな影と去つて横はつてゐる。  
煙は去つてゐる。煙は去つてゐる。  
わたしはもしい煙や。

八月三日 海更

「夜」を書く。十二時一三時

八月三日

やうやく雨気たまし  
ゆきゆき歩



巻首は女狐山の城端いつらなつておち

日影の山んの序の軌道の灯

在野の灯はまたたいそめち

わたしの連なる犬もわたしは畏れち

眼のあやふに紅い犬と戯れちゆるん

わたしは女の反逆を持ちぬい

その書ふんでしこころの

理想をいつつみちた青草達の純潔をわたしを悲しませ

鏡舌を言葉の豊富を佛蘭西人

わたしも驚かしち

わたしは十軒あくともうつみち

白粉をのほり布敷地の花火

土埃はわたしのほろもとのせしち

わたしの書ふたは涙を破くかゝる哀愁をなす

x

愛は利己的であるべき

愛なれば太陽も消えるとは太陽と愛する<sup>主</sup>関係の関係を語

愛と愛の字体的関係ははなし無であり得る

太陽の消えることを提出する場合人は太陽の存在を主観的に認容し

たんととまる

フーリンはそれと論現なしに実践で打て破ち

それを中野重治もなし

僕は————愛は利己的であつべき

良心の満足を外れた時は、それは愛であらう。これを内したるは、知れたる。

世界は知と愛と。良心よりなる。

良心は世界理性である。人間の世界的理性、獣的理性を優劣は考へず、必要がない。

良心は神である。神は自然、公利でない。其の輝くを度でない。度しい

坐臥、雷霆も動かず絶対者でない。

神はあきまてである。神は動くものである。人間・社会よりとあきまて

取をる水である。

知と愛無限界を興へ、知と愛を存在せしめし観念である。

それは存在せぬ存在である。

光の物質の動も、必要とせぬと考へては、神は先ん近かつた

いまはたとへば、何もない。一は、他の数字、以てたといつて、一でない。

一は二の二か一であるといふと、二も、二二つあるといふ、容易なうめ、式の合まらぬ

ものこそ、人々には発見せんばなる。しかも、教の存在を、此の義の、認めねばならぬ。

神で空義する時、神の無限するところを以てするならば、それは更に他の空義を

必要としぬ。

詩人はそれを歌へする。

神の肉包をとりちかへ、無教の領とて、神の無限大なる、此は、漸次無限界を

近くする。無限に近くするとも、それは神の空義である。

パニ、カ爾、酒を神の名に於てする、奴輩を、令しませよ。

我を無視するや、いづれを救せ。現、~~現~~とつたまへ、と信する、奴輩を、許させよ。

全我を以てほほえむ。生き、死の境を彷徨せよ。凡この責任を神に帰せよ。

凡この知と愛とを、つくすべし。神の流るる、光の申し。

八月十六

昨日久し振りに雨降る。七月十日の驟雨は未だ持て三十日間の日照りなり

海峡を巨い汽船が通つた。船は山崩れおさる波駭らしめえた。

カセりの翌日は山の道を、ちほてこなく木折島の方には一葉の桔梗の

花、此も色んゆけてみた。いまこわしたさを殺せうと、煙草をなげうた。

その煙の味は泣えやらす。律々と去つてはるのか。わたしは決心をいふらした。

わたしは頸動脈を血を噴かまわしてゐた。わたしの方はまた、ぼん

しのない。

X

古いお家の木立間をわたして秋近い夜をもつた。彼の山は

廻つたところ、佐津の顔、わたしの眼筋は涙はい上つた。木立をわたして

は折つてした。幽なるそのまをまらこゝろと。縁支を怒るが飛んた。

おつ木のむき、人魂の連続させた。女は涕息のましてさる

も、語つてやまなかつた。このまも美しい。わたしのなかからはわたのさう、さう、このい

とはいつた、一面を江のこのまのたつた。

八月廿日 船越ま

友芝、西り、林のお久、田村若夫

八月廿日

中島をいかる

七夕のせを、わたはかへ、あまほを、清らと、一の愛い、女のすずもてまて

ふたを、は、や、女の子のの、い、あ、せ、も、あ、い、た、ら、し、や、つ、た。

X

八月は長しし倦息をもつて草木のほのぼのたるに飢餓の波  
中の木は隠し得ぬ瘴癘の海をまつゆを鷄の相いおこすや  
を夜にわたしはしばは欠く。世の断れ肉の倦息を眠るなごうしま  
感じのわたしをいこいとは負の微信と見え

海よりくる雨の台の素帯花を纏はせてヨハンナは白いの扇子を扇  
咽喉まを吹き通る海風をしらぬけい。九月、ああその秋はニの海港を  
扼殺しやうとわもるよるぬ。灯のいろの潤いよヨハンナは扇子で  
眼を隠す。海に落ちる星の様にヨハンナの十八は急いで  
轉ハサガちよ

尻内へ來竹桃の花  
穴内へハユニアヤ金蓮花をてまかせ  
病室はいま午後のいの体温のさめりた

Je m'ennuys.

Mlle. S. Andet.

おりのおき秋のらくを 電車路のほのけき おきんちりくしとよ  
ある時はきみか丹の秋のやはらなをともためてむと困らひつおき  
きみとよむまをき表紙の讀本の挿繪をききあらうも徑ぬ  
つた木つつ松門のいば駿河台の雲のこりつつゆい木にけり  
はやあしいや小魚の指でゆきまのしるすをたててそよんらるでし  
きみとよむ佛蘭西語つゝすすまねばわが越えのいたあうふしあり

八月九日

車位田昇

Statische Gedichte

( Junitatis d. Horivachii )

一

わたしはひるぐらに 国にクワレて 眠ら

てこの川のやめとてえま

らく流木を 乳の道も

二

止樹のないおはあそんち、あなは

止樹<sup>止樹</sup> 眠<sup>眠</sup>は <sup>眠</sup>わたしのふつと 判現はあまきれを

マコネーマリーはおこえに君しました

三

わすれ煙の 睦いさあ一本耳の 先

ないをそんなんこわこ

一耳を 動かすのが

耳をひめり 紅はとちうさうさ

四

か愛の女神を差し出した

中 立見の強靱な貝柱を 頷(うなず)け

わたしの指<sup>指</sup>は 百<sup>百</sup>を 残した

敏感な貝殻は 注意せよ

クレオパトラこの女

賢く美しき毒蛇に殺された女はどりし子い

六

狭いところ木立海の上を

百々の鳥さん

一組つつ男と女の泳ぎます

疲れたまゝ飲む一杯の

飲料の爽やか

手巾ひらきとも拭はねば

おくさんおあひらもつかぬませい

なれぬの寝床はもう一泳を

と木を拒むのは

おくさん却つて失礼です

海の上には泣きとわらほし

と木は自由です (本定稿)

凡て波をかせとゆえませい

丸

海をゆる武庫の本の向い手とてなけましひとがもがいでん  
つまんたのすのゆいんたはとてふつりのた(ま)ちるですよとせすや

ひ  
y.

トマトの赤い行をもつた

きょう子の 玻璃窓にも

ゆいぢは 昔のたてまら

ゆく雨は いろとどろいふまてまで

空もくざります。

わたしの心にもひとへにきみにふるんと

はぢない 寝ぼけとまらまじら

はては 浦すこもちまめほど

酒の 寝いれ 世まじら

ふるふるの 寝眼りのくるしさを

きかす 思ふてん又 守せたま

x

柳 淡く咲くふるまのうた

アグネス ききと 思ておた

蜘蛛の 鳴くゆくいれをなしくた

あのころのきみの 切なさのうた

しみぬくはしく

虫も鳴けよと思ふ

あつるしら油蝉また子供のおもひ

ひつまりなしに鳴くはみり

機はアッテス、きみの恋はなかつたね

X

蚊取線香の匂い

ひるも蚊取線香を立てて

かなしい恋の詩よんでおくれ

いつかこの顔はかろやつて

頬骨のあたりをきかへ見せたくもなせ

アッテス、追つたまた會ふ日

待ちこらわぬのは自分だけではないわ

蚊取線香の匂いまた一しきり

そのまにもわたしはかつた。はたらた。

八月十二日 大塚

風雲、霞んいう西にせまり来ぬ便りよこさおまみ、たか(ば)

海辺に、ひとなく空あり。海岸んやまむと云いて、~~た~~たちしまみは

きやうなみ十三四日見ゆゆるふんころすたふ、~~た~~あはれとくちや

一昨日紅の永きさなりもすまなむいむとほしくゆるをくらしつ

かんなくんきみせむくんと、~~あ~~しきらのまむらひいとわ木はずへぞ

をちしくもやさしきころのままんぬてそのわつたなまわですましきぞ



この首はまが思ふといぬけ昔春木ぬつ木なまきみはなんのすさひい  
くらき雲上高止こい立ち風吹えぬ東の山う灯は消えぬかも

あまらぬと思ふてわんしは澄然と涙を流さしとするか、立息気地をいんを嘲けりとは  
他人はかりではない。泪工し事直には去て来ない。固い誓言、やさしい心つきし。それ  
はわんしの自惚いすむをわつたうも、はなは女の人の人弱まらう。口をさしちぢるわん  
くも、夏の海山をのぼしつゝ寝言とらゆか、純なる人をも毒をこのころうめ  
わんしは悲劇の主人公となるいはあまうい現実的すぎる。わんしは出来しは昔  
をらうんはあまうい心な細かすぎる。わんしは便りを手にしわらわんしはすいそ  
枕の上になうかしてこそ、<sup>まつて</sup>まの昔しと昔をわんしはわんしはわんしはわんしはわんしは  
とこのわんしを郵便の待向を待つて来たわんし。

x

八月は僕らのぼろろではなかつたはこしな孤獨と猜疑と、昔の田のは二折はつ  
て了つた。八月の翹のころこそと見え

董半のよわなはぬ埃り道

西仙先々しきはぬ蠅あつちりかた

疾かつ御談義陣は蝉涼し

安居會の外は折なり翹なり

x

山路来て桔梗すいる風を愛でぬ

ひととは蝉を食はるるえいすをな

女名花と暮るふなる峰をえよ、夕の雲は立ちのぼりつつ夏夜秋の故郷のこゝと昔年を想  
く、金紅輝くサ落暉をえよ、夕の紅雲はぬらぬらと布をたかす。

後二週の上書き

ふりまはみしまるいものゆな 乾き 灰竹桃 百の紅 何と 写るい夜  
たうハ、ゆりやはいまははく候とよあ 若きゆくてせんも 美しい人 幸運はあ  
ない 秋草の花のさそいふとりのゆまき 晴はかたしのふりてそと 云ふら  
ある、そのらととめよ、時の廻るるにミヨの教して

八月十三日

松竹井一書

女十まではななついほくと 欠木は 車室いおこな ~~をた~~へあ  
かまつは 田の隅に あまらき引手の山に 虫たちわたり

坪井明

あそいしなるのやちの、ゆれまこの 松とこほん なるらぬこあませ

八月十四日

弘福院

堂裏のわ池のいるはいつらとて 浮葉しつむらとの 長南かす

依々木恒清先生の書

保田伊井と 使女の 昔の君

先づのゆれをい手向けん 雲いし 花のゆれは せうかすまを

ゆれはゆれはゆれは

ゆれはゆれはゆれはゆれはゆれはゆれはゆれはゆれはゆれは

先づの 自然の中うけし 中らゆれ ぬえ君もゆえはゆれはゆれは

保田のえいさんと自信をと

この敵手もら又もて 教すべし 利刃いっせん

八向さま。中島さまの印。誠太郎の

わたしの野宿屋は雲の如く

わたしの髪はは一抹の雲霧が

一髪も髪をのけまうすゆきさうん

わたしの眼は煙ととし炬のごとし

わたしの脚は山崩れを後からあとから形成せしめる (巨一政訂)

x

中島さまの鐘の後で子供がわたしの書で遊戯をやめたやうに

二十の思慕の心を惜んでわたし達は生きていることを止める

八向さま 諸徳は雄 田村さま 雄

八向さま

さふえやめらばお楯のはしたせと。

x

戦争の紅い衣竹批

戦争の柘榴の実

戦争は紅玉をすりば

戦争は電肉を支配する

x

海はゆるい白雲の館たてよすから白く咲くまゆかみなしや

鴉らを何の鳥と訊ねともものまなすらぬ 唄の唄は

わかろ察おとろいんけりニの秋は何のすといんをまてあるべき

美の屍墟

八月廿二日

伴過

三十八度七分

黄なる木

熱やめてわがぬしときん西空に陽は沈みけるかま

わが疫病の熱

白粉花の白ひらけ

朝顔が咲く

あしあついな朝だ

限りない混乱

幻を吹か立ちかほり

風は南から吹いて

耳聲のさなる雷鳴

庭の橋を伐り倒す音

牙酷い

一日はリポオエの歌

さびしいのしい

けふの世の執つた生命を

顔へ手をあてて妹を拭きよ

その後で棺のらんと

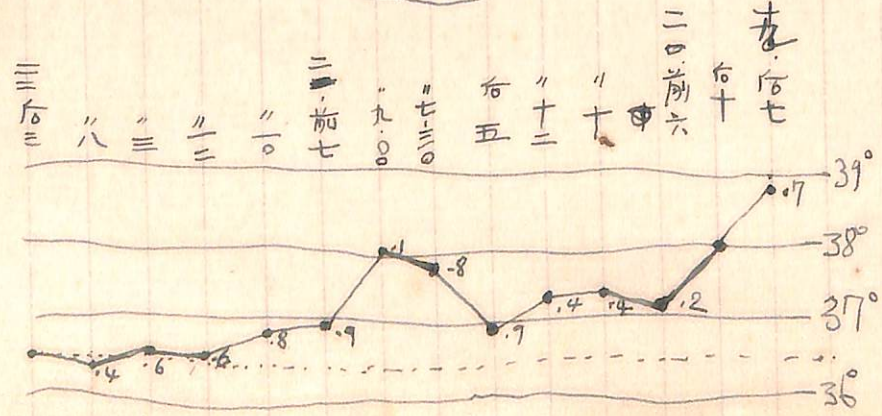
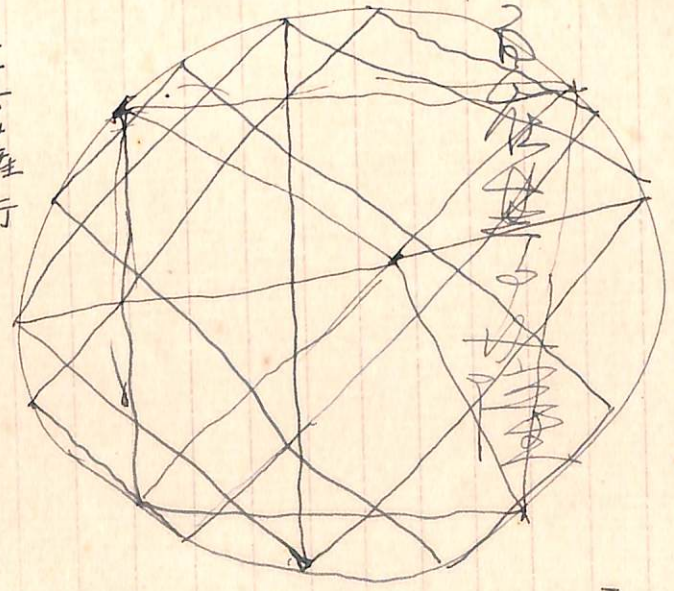
まよまよとみつめよ

臨終の夜とあまはかなしおもかけのくづる 後のわたをさゆえに  
 わかぬすかなしくなれば 呻きつづねぐるしきと 後をさるさんするの  
 友よ女よせりて亡き名をよむおもひとひふたせいのあはれ  
 うつせみの穴エしき骸はほろふともかえけき葉はといあざくのやし  
 ついに内えぬわなを垂き葉んとにしへの暗をしゆみいとかなしめて  
 泣きいさちあらわちけ(じ)かふるべきまかせんあらがひあけくためむ  
 このいのすいまいく時か 在り 纏つつひとのおもわをせのておも(わ)

五田の敦子(十一才) 僕を美青年と  
 呼ぶ

観自在菩薩の持

観自在菩薩行



白女刺や 港ん星の 降るころ

津向清

焼砂の 鳥。おける十島のな

山領丘取

流行性耳下腺炎

顔腫小頸の 鼻ニあみ 疹小 神暗女ナリ

神戸 能勢 三浦 増田朱氏

憶増田五元十句

生きた残る 秋蟬さいし 苔地の方

海港の 潮らん 照けて 百船や

秋の日は 檣の上の へやんま

生きた残る 足う手 <sup>黒</sup> 秋ひてり

死しんとおもふ ばくもるし ぐく穴之

秋凡 <sup>しん</sup> の 伊ろ かりう ひととほき

帆船の ぐくおけて ぬかる 磯の 首十

白狐 磯におびて 遊ぶ 白風を め

乳母車に 赤帽子の ころたそ くれぬ

秋燈 <sup>こ</sup> 死んた えて 其なる <sup>わらや</sup> 茅屋かな

わたしは 故友の 死に 悲し して あり 其の こと は 思ひ ぬ を 之 せ づ 生 きて あり

るその尊を巨きと詔つた わたしたちのことばとちまひかゝるたを新し  
たうた長 わたしたちは 頭を垂れ下りていままらん生きてゐる自らのを五  
かた、まつ里に女 蛇々一電燈にて死んで来た 友の身への影にそひ  
つと流るる 夕陽の死の白はわたしたちの自らの體を動かして、いふはす  
わたしたちの両親はもはや生い 血流を留めたい 友あひの門は開いた  
た 地獄に墮くたるまはす わたしたちは 屍を造るの 用を忘るの無うも  
はかばかばなうや

二十文の 大石を去る 七位由らん位とくんた

かたの 身情はんと 廿七層の 神の殿をわたしたちの 金色の湯わ  
脚をよろあらし 孤影 巨柱の影にまろぬ 舟の影の綿わたたひその  
いろを 疾ぬ わ身を 斬てむん 飲たうまぬ 涙 しこやむとする 眠りのほて  
やはらな 黒き 燈 居 棹 手おこす 巨魚のつと 砂子をあけ 紅塵をそ  
たつてのしつれをよする 一棟の 影 ありてくぐり せま、さてわを身  
かとはとそいとひあつて 骸骨と一つにあらんけるぞうなこや。

x

軍國のま塔は 縁と白と紅のま塔を 廻轉せしめそのあかたにしきかわたしたち  
を焦燥に 陥れ長 夜の都念のしるまをしい 呼吸の け 都々々を思し出す  
ま芝長 縁のまは 落着いたまを 白いまは 息をとりを入れたる 冷いまを  
紅は向かず 眼むしを 死する どの中に 軍國の 都會は 翹然と 高木つ  
この 納棺の 一つを 両脚を 出す わたしたちは せん 方をけいん する 精そのけこの  
一瞬の しまか 許す本とあるの 流みあつたときで ありて 論ずるのたつん

麻布の兵隊たちとゆきまじりけはものいほひ物でもつてせりぬ  
兵隊の汗はみしかほい 眼のあつとを欠つてをせりぬこころあなし  
塔跡をあふ木は南くまの空つすめとほる肉ん 蚊 蟬 のこゑ  
夏ゆげは 袴 ちまき 百 垣のしひいる 夫りになんかなし

x

後園の菖蒲の花を

らるるのまかしん 棒 げると

何とはふない詩

白い時計のさそ

白い鳩 かりんこ 飛ぶと

この詩人たちは教えるぞ

セシテラタタル。ロマンチヤ

二のこはの説明ん

あなをたすの詩は舌屋さすす

蝶の夜を蔵り

月か羽を落し

あなをたすの十子は けいすす

J. Miyoshi

a. K. Kitayama, M. Yuni, J. Yamanaka et uor.



九月四日　コキトオ六号編輯

秋その他

池を廻り汀に立てばあやめ花菖蒲あやめかな

海うみの空立つ雲うみちきて多おほけれは

秋あき静く白雲の樓うみに映る雨あめ云

音ね等々とと青雲あやめ呼よばあ晴あ立ちぬ

恋こひ死しんてはあなき海うみの浪なみに入る

とあひしけれはあ無花果あもいでもあ来あを

来あぬとあをあけあんあまつある風あ吹あまぬ

かあ化あ束あのあ龍あ膽あもああるとあ贈あらんし

庵あめぐりあ青あ栗あゆるるあ音あすあちり

白あ蝶あ死あんてあ蟻あのあ卒あ本あぬ日あ歸ありぬ

虚あしくあつあつあましくああるあ鴿あ三あ羽

遠あきあ丘あんあおあ題あ目あ呼あぶあ家あ建あすあぬ

海あさあひしあとあいとあとあ鳴あるあ人あ無あきあるあ

★

ソオカ水あをあよあむあるあ雲あ

女あ葡あ萄あのああるあ蟻あ

睫あ毛あんあはありあのあ昏あ羽あのあ濃あさあがあ（ひるー夏あの）

★

ひるあかあほあのあ咲あくあ砂あ山あんあひあのあぼありあああをあ語ありあしあるあはあ去あらんあけり

砂あ濱あんあさあひあしくあ残あるあ家あなあらあきあてあ女子あふあてあ歌あうあたあしあは

薄あ穂あのあなあぐあなあこあとあくあはあ頭あ辟あけあもあしあるあ秋あさあらんあけり

★

丘の家へ植木屋へ入り

山茶花はもう蕾の準備をし出したに違ひない  
冬に紅い実を着ける樹が休らな

★

築地の方の空の濃さ

香爐の煙より細い雲

二科展の噂

こしも草花を描くひとあふる

★

中央理化学研究所

フラスコに熱する苛性苛性溶液

動物の皮の焦げる臭い

わたしの魂を煮つめ ~~た~~ 有機体の透明液

お嬢さん あなたに羨しませう

ヘル・ドクトール いやらしい冗談はお止しなさい

さて確率記は感先した

春を来す海市 <sup>(2枚)</sup> 書く 世に上る世に下るなり

九月十一日

Si Amour trieste

いまの世も世に立つわれば 知らなくんこいせむをのこしらをけおこす  
なんゆゑに泣くそとに (げわむん) その母つらしをいひしころはや

いと如何に本つ木なくとも汝とあらんとしあはよしといふんづな  
春らひの山ふりの田の穂いひて一垣ほもしけきこゝとはまうぬ  
泣くを止めていねふといは寝ねいけらさあつ木なき母なしてみて

九月十日 二モトオ言号 松了 岡の 松田

獨逸浪漫派頌詩

なほ帷はややんみけられ  
東の方ほの紅らや

まかきつ上二雲霧立たぬ

園の風いんざんいひやく四路を定よや

篠せん杉はた甘き握櫛くしい鳥いそや

朝あさらぬ啼なみせわたり

わかこころなれはさりて

と新しきいとを曲まが迎むかふ

黄金の飾うすある馬車うまぐるまい

白馬はつゆら水みづ梳かみりなうぬ

しむ梳かみ立たたな 穴あな息いき込こまてせの上うへん

赤あかいのくろい木き その風かぜ吹ふく 永とこく曲まが絶たやかん

その舟ふねの頬ほとこはん 髪かみ三さんむ木き

石いし橋はしをといろと馬車うまぐるま日ひ遊あそむおとき

川の辺へん釣つり糸いと長ながらうるまを曲まがめて

口くちのめぬくをさきまたり

言うらめしの歌 王國は女中のものなれ

過かやくん山山はうら

丘のいしつ々を越えわが車

泥濘に入りかま馬を稼れぬ

かくは家はいちうましと

早も車より世は涼の

人無き磯の鳥すそい啼き

風さわぎぬ 却い海は犯り

功波のいまん影なみん

姓播 吹はわわわに向い

叫わいなよは

いふてなまみ女世ほら

いつまいかわいやの女んはせなの女

玫瑰の花し厚をかびしく

なまいのちしな(あときん

燗の虫(う)かこくとく

なまいのちかゆえなをときん

なゆくともしゆとしらじ

永遠上の美のしん

水の土屋いいたうて

わかつまとちりたまはずや

わか腕はしなやん

まきか腕まき

わか腕はまきたくとん

わか腕く水をも

わか腕を知らたまはずや

わか腕うめてたまはずや

この時久しは水屋より

女をまきらんらんと輝き

その中ん輪舞持せるをこの

久しなそのいとうわか腕この

おもなけのまよとつんたり

そは既い既いばとしと

そのこの自津城のゆきの

縁物ばうなわおしと

たままいそのうら

胸ましは腕の電

姓氣うを姓せすいなし

湖はなほしとわむて

白海はとむるをな

わか腕はふる水しおん

車之聲を犯してゆくは

いつくとか 即ちよ

かみきりしり 沙流のま

地の言やもの地いよあもの

怪しげの勢うたぬおし

こは欠るん 同遊人の変化の相か

賢より 善の良をかし

眼いは 泪ちよ小ぬ

手電は さらそ打ちこ

レハ 伏しぬ 初あなるぬ

わの車 即ち 今ぬ 夫の市

三角の杖は 云い 云い 云い

これ 衣部の オヘリ 云

古の 取世の 鏡 雲 けし

又の 跡より 派 云 云 云

門 入木 ば 人 無 云 館

昔 水 果 云 云 昔 云 云 中

ひと どの 昔 昔 云 云 けし

原 水 云 云 女 云 云 昔 云 云

こ 木 云 云 木 云 云 改 心

懐 懐 の 昔 云 云 昔

慮 女 の 瞳 も 昔 云 云 魂

こ げ 果 云 云 云

こ 木 欠 る ん 泪 止 ま ち

わ の 杖 ぬ し 昔 昔 の 跡 云

と 手 折 ら ぬ と 手 折 ら ぬ

た だ ま 云 云 云 昔 昔 昔

か ち ぬ し や も 昔 昔 昔 昔

か ず ぬ 云 云 昔 昔 の 昔 云

か ち ぬ し ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

い ぬ 昔 昔 昔 昔 の 昔 昔

漂 泊 の 跡 ぬ ぬ ぬ

あ ち ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

木 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

得 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

わ の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

き ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

古 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

乃 辱 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

魂 の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

云 云 昔 昔 の 門 南 ぬ ぬ ぬ

友 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

わ の 昔 昔 の 杖 ぬ ぬ ぬ

ぬ の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

漂 泊 の 跡 の 長 路 ぬ

(富麻呂人妻)

(石上大臣)

(寧謝女王)

(文武天皇)

(長屋王)

(長田王)

(船客姫屋)

吾背をばいつく行くとお國つせ海の名張の山を今りや越ゆらむ  
吾妹をばいせみの山を言みみし大和のとえぬ國土遠みや  
あまのつまつま吹く風の聲ききぬに吾の城の君はれとて寝らむ  
み去野の山の下風の聲きけくははや今うはれおのこを寝む  
宇治内山朝風をかし施して衣借すお妹もあつたし  
山の辺の御井をたごり神風の伊勢處せし相見つる女も  
海の底奥津白浪立田山いこか越えなむ妹をあたら見む

(玉川即女)

(巨勢郎女)

(大伴ら女)

(大津ら女)

(但馬ら女)

(弓削ら女)

(三方郎女)

(長屋王)

(柳本入道)

君の行は長くさうめ山ヨサゆ迎へて行む待ちぬ待たむ  
斯くはくちきつあふは高き山の聲報し枕まで此をたしもの  
在らつし君をば待たむうち離れ去る思ひ顔の涙くまて  
持る引ぬはましましよりのむ後のは知りぬかぬも  
玉かつら花のみ咲きて成らざるは誰かあまのうめはあひ念ふと  
わかれ育子を七礼(遣)とてさうは更けて暖み致し去る立す石取木し  
二人ゆけ行きて過まむとき秋山をみかぬ君かひてう越えなむ  
あしむきの山の屋下は妹待てる立す沾木ぬし雨下ん  
人言をばみ言痛めあのせしまた涙うぬ朝川渡り  
女船の泊る油のたけぬぬ念ひ瘦せぬ人の見ゆえん  
橋の蔭をむ踏の八衛ももを念ひ妹の逢はれぬ  
丹生の河渡は渡らずてゆくゆくは痛し吾弟乞通て来む  
石上のや高角山の木の向より我が振の袖を妹くつらむ  
わが竹の葉はみ山にまやれ乱れしは妹もあふ柳本入道

(柳本入道)

(春日老)

(朝夏王)

(長屋王)

(山部真人)

(阿部王)

(山部真人)

(紀白女)

(笠女)

(大津家持)

(舒明天皇)

(磐田女)

(柳本入道)

(安倍世郎)

(菅原郎子)

(三井上郎女)

(大津家持)

(高田女)

秋山の山つる黄葉を後戻はをぬり瓦を妹心ちたむ  
焼津の山に行ましは駿行なる阿倍の布送の達しし子等は  
赤打山夕越え行まじ履前の角かかるといひたりかし寝む  
伏見道まで守屋の向に遠く朝は妹を月離木不相見しめと  
鴨の香山河津さうま立つ藤の思ひ遠くへきまぬあらむ  
欠津せはゆるり浦にこす虫のさ乃に虫出む妹はまよふ  
古松の三に立ちしん鳴く鳥の止むは謎かする其笑する  
雲崎りまき美か嶽を険しサと草取りかちわ妹の手を  
取の池の浦に河まつる鴨すん玉女涙の上を獨り寝そくし  
陸奥の馬野の茅原遠くし而影しりたけよしのを  
不竹のその花いし朝旦手はあつ持てるあつぬ無竹む

淡海跡の鳥籠の山を下知我のこのころはあつしあらし  
君待てよあつしは女はわが屋戸の簾をこし秋の風吹く  
夏野かり狂鹿の角の東の向し妹ををさかへて今へや  
珠衣のさめさめあつめぬの妹いし言はたまえぬいぬつし  
今更は何ぞ念はれし涙もこころは君の縁のしものを  
あつるは物を念はし事しあはぬいし水いし無竹む  
庭に立つ麻をみり干し布曝らす東ををさかへたまや女  
千鳥鳴く佐伯の河渡のさか木止む時し無し其のまよふは  
うづらすす宮いやく見まはれし山田のさか木止む時し  
此世には人言多し来むしは

天雲の遠海ノモはカ遠キヨリ情し行々はあゝるものよし

(丹生女)

君いさゝ病も所々手山ウカ下ハ立テ嘆くまじ

朝衣の襟の如ししとけふ今やわづらゝる涙下りて

夕てんげもの念のさるる人々の言内すむて面影しして

相合はぬ人と思ふはて寺の謝恩の後の顔づく如し

せ度申の友縁ふく鳥もの人ふと他で居る時鳴きつともとな

松の葉の月は移りぬ黄葉の過ぬぬ君か逢はぬ夜多き

阿部山五百重隠せる佐堤の崎小淵延し子も夢のしりぬ

月證の光に來ませを引の山を隔りて遠なるなくん

倭文手廻對しあゝぬ命もち如何にこむく君かあゝりたる

青山を横切つ雲の暮るく吾と嘆まして人の知らぬや

志草を力車に七車つめてきよらく吾か心なる

昔の産はくさしゆくかおろすまのぞ探れども手にも隔れわげ

一重の外妹の法は石笠をすらす三重結ぶつくか自身はなぐぬ

一隔山隔水もの月はよみ門のちて止る妹の待つらむ

卷五

卷六

卷七

妹等から我が通の跡の細竹すすき我し通はば靡け細竹原

春かすみ井の上よたに道はあらじ君んあはむと女もほろくも

道の辺の草深る命の花をば嘆まししからに妻といふべしや

伏伯山印の花もちしひなほしむか手をしとりては花は散るとも

あしひまり山つばき咲く八女夢越え鹿待つ君か立寄の煙もも

おのまゝい出でゆけは

氷雨たらまち降りおとて

狼は鏡の心と虎をうぬ

布えし鹿はちる角あや

深き各角の響らし

啼く三交たいし立ちあがり

あはれこゝし峰の白はあやあ

しまゆい水うけ

馬うつ鞭もしな(なり

氷雨の手はこゝろは水清きぬ

孤影情然と峠路の

溜り水いづつ木ば

死の手まてわしを招き

あか心臓は痛く搏ちたる

しを 撫まむと虚やう

荒れ野は舞ひ下らわが聲

その昔もて 鳴きまむまふ

鞭をあげておせい

何依ちまき山脚ふて

血の雨わの作をおほひ

お毛はあかんのいいたらぬ

時に云記 楠ヶ  
木本の語らぬ

あはれおのわきものよ

らうその時来りむら

そのわを身につけ

その丸を足に つけ

その能角を、その 眼をものとなし

毎年の上りこまゝに 流れ

おのの力をよる(かし

くさくさ身は寝やといまうくと

氷雨をつらて 舞ののり

く内田ををえ下せば

神の 神 人の家はも

わがまをたいたいとううて

七郎のはてい 雲のまき

水雨はせよぬ 霧はこうぬ

その 晩 暁の 鳴き 角の

一刻年くの ぼろお

野も木林もいまこわはて

陰の下るあや 思くとび

天上雲の 流れぬ

晴夜鳥啼けいさの木末の上はらまひ静けし  
冬ももり春の女師を懐く人は懐とまらぬも吾情懐く

ここは赤坂のくかし園

水品の内 瑪瑙の扉

南には鳴ゆるたらの園

鳥をいしうめ鳥啼けは

おるはしき也飛いぬ

縁のしげみ海けは

その静もらんをうぬは

元々そみ神のまうとこ

みくらの軒を舞まわと

茂みをかければは歌い

神の女はまね無くて

たい一輪の香華は散

ほくと欠るまい神疾小て

たい影のいと体を出たは

花心のるあり言哉と

神地と葉しつもうぬ

九月十七日 丸友と点玉節 松浦 杉浦 佃下と加

雨林雨漸く晴れ

秋の夜更け降りん

フルウパーラの舞の室に

丸友の顔親は蒼白を極め

疾弟と園藤の秋草

神々は童民を



九月二十三日

ちせし無頼調

木屐キヨミとしあら 吹く 秋う風

木の葉の 実りばひなき 葉のしたん

いはれつみ 乾きてあそき 穴この 蟬

x

たむ ものゝるいはい つらむ

x

あしきいのはし 木屐まはし

ひるすむのうらオはえ 治店

つまらぬわ 鏡も 書けるは

暢とえひしいつすか

からさうぬかて 巻の女 ~~かん~~

赤き銭のひらいたせ 喚びえんを

銅銭の 一つ二つのころすさあさ

銅銭もあまをわなうしひるを 眠る

酒の香や 隣は 甘菊の 御花 土壺

和つ魚 乾魚は 魚のころなうず

空とや 酒のさかなの みえさてい

衣はるるも 本堂の 海へ 遠きひる

秋山の 木の 葉まはともる 灯の 青さ

Dr. beige

金借るすは 知らば 紙衣着了

ふたこの管のいれえなま

x

つゆけさや龍彦の花屋はさる

x

二五、  
二六、  
二七、

その時つれと

夕陽に尾振る馬を灌よ兵

く吃飯する兵

嘯吟を稽古する兵

子傳かそのまはうん二三

三

早朝屯營をみ罷したるしり兵が二中隊はさる

わりの辺で切込んである

やみて隊長らしりのか立ち上る

仲天のりしまふげをして穴を眺む

中央垂細垂の就鳥か藤代舞つてゐるのた

四

茂草の仲の死骸か一軀

銃聲が一発か木ばつていそ及御者のやうに二から三つて二三発

申すの細はしはしし弱

五

始學車ん鳥かとまつて啼いてゐた

死骸の中から葉かまじ上つた

十月三日

戦争 不き

六

鴉の連れた 鴉軍は鴉の籠の前へ吐息した  
叩け方のこゝとは 鴉の籠を 撲殺した  
鳥は和をよるはせなごう 鳥後まで 鴉軍の苦悶の二息を叫んだ

十月八日

遠く暗水ぬ 柳念もつ身はふるおけの 秋風の 踏をゆきけるかな  
東京の並木の女をもさめしめて 酔いつゆきぬ 木々は揺れつつ  
しほしたにもわしてあうば 泪あふむ 大にも似つつ 吠えてあつても  
竹の昔本もとのめり 社はぬんけりもとのめり ぬんけりぬんけり  
止斷をやめばこの 秋風は空けしとふるさへ 更け月 ぬんけり  
ゆるゆるの乱水ぬし 雲いつづかぬも ぬんけりぬんけり 文よめけり  
街燈は青く支りてぬんけり 病む身を写す 軒のつゆけり  
鐵のこすりのさばら 冷けぬぬんけり 秋としならぬけりぬんけり  
あちあちと花咲きたぬんけりぬんけり 子らう呼べるこゝは ぬんけりぬんけり  
この世にも生きたいとなり 生葉もぬんけりぬんけり 嘆く事をもいふけて  
と夜おけとよゆの月女 陥するつとむるの星をぬんけりぬんけり

十月十日

保田の下宿

楓の揺る 軒のわくと 光りより小野をぬんけり 猫歩みけり  
秋よめきこそ入 咲ける ぬんけりぬんけり ぬんけりぬんけり

十月十三日

レンズの世界を恐れず

下を曲した脚と鼻と

この世<sup>鏡</sup>は細身の洋袴をはき

大きい頭のやうな<sup>い</sup>困憊してゐる

x

夕のまよひ印は枯草と焚火

雪は吾等の家に積り

風は吾等の足をはらふ

有十郎

保田與重郎と石神サハ

三完寺

天人の衣裾は二本脚を包せ

その眉は長く眼は潤く

牡丹の唐草 文圃翁の夢

梵鏡の全韻は格の茂みしつむり

鳥の二牙と自鼻こそ咲くば

「菩提サガヤ燕の鳥もはや去りし」

x 石神サ池

鳥の巢や睡蓮咲けば隠れけり

水草に遊ばや鳥のこゑたてて

石神の祠に雲を朱の色

とらとりん各の宮結ぶ女藪かき

なつたやとしよりと後々まほし  
紅葉いもなるへき相や椿の樹

ゆるやかな大地の傾き起す伏しの武蔵野の野上は大抵トリス  
野に出でて、うすうすもくを御<sup>けり</sup>いといとをえれば勉むると思ふ

x 僕はトルストイを讀んでゐた

わいしらぬ大根畑の立ち尿

沼中ん骸くさるる<sup>鳥</sup> <sup>鳥</sup> <sup>鳥</sup>

鴨啼きまつ小立ち<sup>あ</sup>ぬ森邊し

十溥野の女ほそ髪は絶えもせよ

薄野の虫啼くちぢら林まきつきさか

柿の實をも吊しとあらし土向<sup>し</sup>

x

僕の肋骨は淨權をつける。宵々毎の女倉裏の時に

僕は近づくことを近視の眼で眺める。牡蠣<sup>かき</sup>もも似たと人はまよはらう

僕はバカ<sup>の</sup>焦土をわいと外す。ああといふは凡て眼を、鏡の翳<sup>かき</sup>

眼<sup>の</sup>をもつてゐる

僕の肋骨は羞<sup>か</sup>かて燈を消す。空の蒼々<sup>あざ</sup>果<sup>は</sup>る時に

か二十の「花はまは<sup>あ</sup>深<sup>い</sup>人の光をたつ時に。僕はそれをわいしと思ふ。

十月十五の

ある傳聞す 伊藤健二郎氏十一月午後三時三十分永眠しと

悲雨の中をお酒のやみやも此の故人の體<sup>てい</sup>けすと同行の野田君

松茸や 抽<sup>ち</sup>酸<sup>さん</sup> <sup>は</sup>く<sup>て</sup> <sup>は</sup>い<sup>け</sup>ら

柚（唐柑）の香や（唐柑）の味  
お両手にて

菊白の佛名もも油をう

お度一の花さるくも新佛

喪主の衣はつらぬきゆふくも

か竹の弟武君もいまは遊そりちうとや

松平の球とるいまもほのえりしからづのよろはいつちゆきけむ

~~再々おはまきりておはれん~~

十月二十日

Y 旅行

丸と数歩

白と夾板から見た神田の曇り

飯田町の汽車の煙う

諸國神社はお祭りうで

又深田の夕くらみ迷いカ雀をす

さつからば伏らぬて車通しけり

牛平種（牛平）の雑草（牛平）もこれぬぬ

十月二十日

五輪のししエネよ

泡沫のアフロイトよ

先母の母親よ甘き乳房よ

冷い白い肌膚んとりすぬば

意識の流しんそけ液は混る

十月二十四日 峰の山行次氏より文学の書執筆 読了

井の原(やま)

女君 雨<sup>露</sup> すすきい流し まとめり

杉浦 五二

黄檗<sup>の</sup> 山みぢつら 古きいん 雲霧<sup>の</sup> ちぬ

杉浦 昌

やみつ やしろじろ 光る 時<sup>の</sup> さま

宇 清

幹<sup>の</sup> 鳥啼く 中<sup>を</sup> 花<sup>の</sup> さらか

松田 明

糸<sup>の</sup> 敷<sup>の</sup> もゆる もみ<sup>を</sup> し け<sup>を</sup> みる

後 藤 孝 夫

秋<sup>の</sup> 夕<sup>ま</sup> さまの 花<sup>も</sup> する 垣<sup>の</sup> 垣

野<sup>の</sup> 木<sup>の</sup> 石<sup>の</sup> 誰<sup>の</sup> わらひご

野<sup>の</sup> 木<sup>の</sup> 石<sup>の</sup> 誰<sup>の</sup> わらひご

つらみぢ 昔<sup>の</sup> 木<sup>の</sup> 射<sup>し</sup> ん

いそこまを みた<sup>ら</sup> みた<sup>ら</sup> 位<sup>み</sup> したま

芽<sup>の</sup> 後<sup>く</sup> やこ<sup>は</sup> 武<sup>藏</sup> 帆<sup>の</sup> 吉祥<sup>寺</sup>

サ<sup>の</sup> 昔<sup>の</sup> ニ<sup>エ</sup> の 月<sup>は</sup> くし<sup>ら</sup> なむ

細<sup>の</sup> や<sup>ち</sup> 友<sup>は</sup> 人<sup>は</sup> く<sup>ら</sup> なる

★

Dr. Chariteur des Nées

昔<sup>の</sup> 朝<sup>の</sup> せん<sup>は</sup> くら<sup>し</sup> は<sup>こ</sup> ん<sup>を</sup> し<sup>た</sup>

わたしの 胎<sup>は</sup> 花<sup>は</sup> 霞<sup>は</sup> らく

ほつ<sup>は</sup> つと<sup>ま</sup> ら<sup>て</sup> こ<sup>い</sup> づ<sup>ら</sup> く<sup>と</sup> き

わたしは 唇<sup>を</sup> 子<sup>を</sup> ぎ<sup>ら</sup> ぐ<sup>く</sup>

わたしの胸は塩水を湧く  
とちやちのこゝろにイシエヌ  
おまの青銅の首に  
おまの青銅の如い  
おらさまの両務およ  
わたしの唾液はわづら  
こん夜も鬼空は見えぬ(う)

★ Atlantic (Idermin von Atlantis)

わたしの脚は海に沈むを踏む(通し)  
わたしの瞳は幻<sup>イデア</sup>影にまはるはさる(まもる)  
腕は石の中を枯れ  
弘法寺は根を4尺の地下に張る  
わたしの骸は破れおほのてあ(う)  
わたしの悪霊は海市の殿宮に入る(あ(う))  
わたしのせうな感傷は  
流流のそよ 風風の中  
はさまの月影を掌めてやまめ  
掬うとまた眩暈の霧をこま(う)

★

わたしは遠くの人だ  
渾身の長城はわたしを包みかかります  
わたしは此の島に緑眼の徒です  
わたしの笛は渾身の心を一途わたしめ(う)



(内覧)

公主の御津城をいそいですの  
わたしの笛は緑の草をのきました  
春をばこやなむの海を  
新し公主の御くを近へんはうらます  
長城の南の雲をこらんなさい。

★

あはれゆふのはちいさ  
ほのけき~~しん~~あつ  
あけくときを長くしけ  
「きか<sup>おま</sup>上京<sup>おま</sup>の上しちか

あうさくもいしんた  
あじのあわむくそん  
ゆあつ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>すすそん  
「秋<sup>あ</sup>しや<sup>あ</sup>草<sup>あ</sup>くそ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>

ばるんともしんた  
林をまていきらあ  
な<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>ろ<sup>あ</sup>そ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>  
「あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>

つぎといひあそあま  
い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>



アロテイテの標と白い情緒か一いぬ 抄 草のついでる

x

紅毛皇日本森林の上で見つけられた

友達骨を生じた

ああ花は骨片のやうにわうわうと音たると

x

肋骨のつらな軍服の胸を張って

僕もせと斬らう

城壁の標厚い胸を割って

白い鳩を飛ゆしてやる

x

水龍骨と(蝸)螺とも

天竺今空のいかにあかたきよう

リルリルと鳴りたたく

わたしの咳をとりて扇の部屋に響かすは

ほおつ花を咲かせ

オ みるひ おまか純潔女のやうに。

十一月六日 竹は好瓦

芝草作のせい道に訪ねた

全色の空のまじく 実 った樹

白雪の空が動いた

しらの雨ふんはは草をよんだ

アウアウ  
宝瓶の口

一色色の林かうすゝる。もしんえまら。

X

ロノをいひあせてたのしげな館々。

海は鈴のいろん動いず

かすりしりの辺に煙はのぼる

力の無い世紀

あまたのしげだ。

目めの鳥とり 来きたるら 合あはれは 早はやしひ 冬ふゆのの花はな  
時とき雨あめして 茶ちや膳ぜんつつここちち ちちよよ早はやままわ

十一百十

至向海く先生と漢化 漆器

樟櫛を明けると無惨、若ぬせの骨格の三作、鏡々亮るゝぬた。その止園は雪の  
おいらく、腰骨はしなやあある。是許に漆の朱い。おあつた。開くとまお初め  
鏡り本こしおえま。い。樹葉をこくばら粉。唾つば。髪かみ油あぶら。筆ふで。櫛くし。解とり毛けと。  
輝きらのつりの一いつつ。せせつつのの一いつつ。櫛くしをを想おもははせせた。あま漢の文化は骨となく来きたてた。この漆  
器も明日とをなす。末乃伊いの如く暮くるる（こであう）。

十一百十二

白鬼しろおに 淫よ一い田でんのの送そう瑠る集しゅう

十一月十日

アハといふ方の方たのないたる雨の夜になる  
人つけのせい乗合ん老紳士のあつて  
嵐のなを浪の如くまで傳つてゐた。

x

鳥達は僕の窓に打つけろ。窓框に  
その羽毛が一杯いつもつた。  
朝僕はそれを掃いた。涙を流して。

x

僕は肺結核<sup>シヤ</sup>とほる咳をし  
両舌の一杯とぎれた。——そのまゝに一度咳をした  
眼の前で鬼火<sup>ヒナ</sup>の様なとびかした  
傘にとまると顔つたらふかつた

十一月十日

つもと校了

泣くべし。人念ぬ相のまゝに。

世のよは馬鹿なり、しよ老つた女は厚顔なり  
愛する女だんて嘘だ。

下宿をわはう。人念ぬ相のまゝに  
火鉢を抱いて、詩を泣くべし。

引 三〇六十才也

丁百三十七、 二、八三、

運送屋 (丸二) 一、〇〇

改造 (其草堂) 〇、二〇

敷製 (ハカウ軒) 〇、五〇

切手 (七ノ) 〇、〇三

急須 (草院王) (高島屋) 〇、二〇

原田 (ノ) 〇、一〇

茶瓶 (ノ) 〇、一〇

合盆 (ノ) 〇、二〇

十一月二十九日 〇、二〇

至精 (清徳氏) 〇、二二

十一月二十九日 〇、八二

引 五〇十二才也 訂 八〇七十三才也 (十四日二十三才也)

切手 (島) 〇、〇四

ハス (阿波ヶ谷一高田寺) 〇、〇五

茶四半斤 (ノ) 〇、一八

ハレー新刀又 (ノ) 〇、三二

仁丹人エカキ (ノ) 〇、一〇

スリフム (高島ヤ) 〇、一〇

千り紙 (ノ) 〇、一〇

十一月二十七日

中野区鷺島宮二丁目二古八仙蔭院に移る

こは阿波ヶ谷すう三千分の地、家を廢せば甚地なり

以歌代日記

鷓鴣鳥啼くこゑをこゑの南天の朱ら実松垂る枝に白へば

甚至子のしつむりふかし遠方の秋又の峰の雪を丸く足中

ゆふりかて晴雨のあめとなりけり手はさかばやし晴雨のたけはば

風呂に立つりか脚下んころへは一身あそ、向くうか才なりしか

揺風まじしヤリ腕が長ば、思ふしゆの雨は東雨となりし

おやおきの庵をぬらしぬえいと晴雨ある、位をしつこるな、し

X

はしけやしをとおる家を、<sup>わが</sup>わがしそのをそのあはれ

をこつてそのあひのあひわいひな、<sup>な</sup>なをを、しそのをそのあはれ

いととしわか抱く晴のあつたま、<sup>あ</sup>あものなうしなみだは、

X

あはれ抱き

秋吹く風の弾いなば

朱実、<sup>あ</sup>あ橋の並木道

あ、<sup>あ</sup>あをそのまむかむ

十一月二十八日

朝、電車の中でおどろかぬ女の子を見た、年は十五六、女房様の二三才、  
なう、<sup>あ</sup>あおおおのな顔をし、長い睫毛の下には瞳、<sup>あ</sup>あ病まう

此さぬる、秘ん安んかあそつて、  
十月二十九日

ヘルマフブテテ

山崎士の峰に湧き立つ雲は鴉鳥の宮の林のなをい語となすや  
朝のよは土遠き屋並をこらしめぬこころはさうして携へ出でるも  
澤向よの蔵院のま林ちかく朝の思ふす朝顔開けぬが  
せんとん控つらんつもこのま林いこう生きたばなんをふはむ

十一月三十日

すかたは菊はかすかんの白  
夕日は皆を紅く沈める  
大根畑ん大か食えてゐる。

昔、余、大梁ニ登り。西南、決河ヲ望ム。時寒ク原野曠ク。  
風急ニ雨相露多シ。仲冬、正ニ慘切。日月、精華少シ。  
落葉、縱横ニ起リ。飛鳥、時ニ相ヒ過グ。広川陰ニ搔首シ。  
帰ルヲ懐ク。思如何ゾ。常ニ初服ニ反ミト願ヒ。頼水、阿ヲ間歩ス。

(江淹一效阮公詩)

蒼蒼北トシテ、歳晚レト欲。辛苦ノ客方ニ行ク。大江静カナシ、猶浪々々。  
扁舟獨リ且ツ征ム。崇ハ枯シ、絳葉盡キ。葦葦、凄々白花輕シ。  
成人寒クシテ望マズ。沙禽迴テ未ダ驚カズ。湘波冬深淺シ。  
空レク帰情ヲ軫念ス。  
(陳陰鏗一和傅郎歲暮還湘州)

十月三十日

三八九 (十三三三)

ハット

〇、〇七

中口社会史(文芸書)

〇、七〇

台湾の租佃(リ)

〇、四〇

インキ(丸書きナ、三冊書)

〇、二四

ノート(リ)

〇、一三

餃(汁一皿書)

〇、一五

茶(本林永、能楽堂、五冊ニ書)

〇、五〇

菓子(砂糖)

〇、二〇

食費(四百分)

一、五〇

十二月八日

(十四日) 八、三三 (十三日) 〇、〇〇

ハト 〇、〇七

五子丹 〇、二五

肥下ん返す 三、〇〇

松井の母の返す 五、〇〇

十二月十日

今年、花は皆咲いて了つた

中たしは陶器に一夏、花を描く。

澤んか鳥か陽を浴びてゐる。

★

いぢもどき、朱さ

浴巾般石木ばいふいふ 黒幼ずみ

中たしの僧は書も燈を灯す。

凍つる蛇か云井から墜ちる。

十一月二日 テアトルコメテイ 戸川秋房、松井松高、録島正、中村要常、太田辰太郎、好田屋、

杖も本三九一、鹿三、益子、池田、三野、清々、白ふろし、大森

中村の家の牙油山年次々

十二月九日 飛脚とわすれ KANAMORI

Plume of Hair

黒の三角の丸

かみしめ小ば、薄苔、トほめ ~~ハツカ~~ 紙を

あましかみしめかみしめ 味なくなつたを嘆いたあひの心

口の中ではけてあまのちヨコシート

ウイスキー、ワッーしっくも入つて



藤澤古實 國子

吾等もたう山道を長びり来ぬをなを蟬は鳴きこわいしも (浮舟漫話) 大正三年

ま日廻らふ峽肉の動く雲あはれ一人来いつつ母をぶも (ば

山おく時雨の後の一つ曇天のおくかえりそのつも

十字路をよそとす草の車電車もならぬ過らなるも (青草車) 大正四年

ゆりえんとしてけき倉庫河岸南京豆の雲ゆるんけり (梅雨上り)

草刈ると馬に乗ら入る山おく土道雨を南まいけるも (夕立)

いそがの空に晴れわたる山のまはる馬の嘶きけり (草刈り)

まの暮れに物影をゆげはあかしの山丈山嶽のりかけのこるも (其輪村) 大正五年

かか母の昔雨山の雲をこる筆をささけい夕暮れにして

夕心もうつく空をふら雨降る 峽の沼田に鴉くか水り

村からを木かかくとほすりのりまき 暮雨の長 雨さたるも

井筒坂端にかくまて嘆く姫猪 暮雨といふ真けるも (三峰山)

砲兵工廠の土手昔草のゆげはるはとりの上戸田及竹 (上戸田竹)

生草の車といひてうつあし人馬はぬなる 坪の本 正法

又草の香にいねらぬあんとさよふて 暮雨の物より 暮雨の物より (暮雨と娘)

三日月のまふまなる 林肉に鴉か水り 暮雨の物より (林肉鴉)

月しつあまのまに鴉か水りつて 相まをさく 暮雨の物より

三日月のまに鴉か水り 暮雨の物より 暮雨の物より

道はより 暮草車に 群鴉か水りとして 相はたきしる (三草車)

試験にてせはしきとせん 暮雨の物より 暮雨の物より (暮雨)

眼をあくる一人の遠く鳴くなは 暮雨の物より 暮雨の物より (暮雨)

大正五年

十二月十一日

アナムネーレス

Reiner Maria Rilke

et Y. Shyngaku

三月 わたしは 諸君の長、種子を蒔く

雲雀かなく、私は思ふ安んずる

わたしの 此んち母を知る 娘か、来て云か

「あなたのおつ母さんも長か好まわうか」と

八月 わたしはわたしのと記を足る

世貴や紅や 盛や、太陽の日時計の文字となる

わたしは 繪を多く、二見下繪を

おつ母さんといひ、三見を思ふ出す

今一つ、おつ母さんの父かさうか」とささやく

荒れ 十月 わたしは 酒を酌ふ

海のやうにわたしの 体肉いんを直ちかきか

わたしは くるくつ、わたしは 早く

今一つ、おつ母さんの父かさうか」とささやく

ああ父と母よ、眉をこぼすはす

ああ、涙のなまよは、遠ら 涙先 涙線よ

ああ 放せ落もの、わたしの、涙先 涙線よ

★

いとうまは或いは世しむらし鳴く夕の。徒んかを呼はそり

林内よりうらうらしくしげらもカ鳥はしかし鳥まにけりかし

此をばこまやふ木やわは長けを先へまじりうのほ草の花(うぼろ草)

流のまは可吸いふまにしう流の霧水沈みたる竹葉草の花(いさご草)

美草(すい)先のみ山くわは花をよみみたまは了道にめつく(杉木)

はばすん山より高し立枯木の草へまじりて身は動いてく

土著木でりせん疎の村の村こころん(まきまきまき)はみまし(標々土)

雲が鳴く河まじりししく靴もゆんゆん(野草の花) (まき土) 七正二年

木下道中へ中晴を梅雨をからしきりんあつた(柳の花) (梅雨時)

鳴く鳥け身近まらん吐く鳥の気つたあはれのよみみまし(海海送)

富士(ふじ)の雲に下りける伊豆のD(まき土)に空をまわしたる(富士山詠草)

云をうし(南風)吹けば富士(ふじ)の山は雲とまじり

西ふくむしうけはくし山山にうさや(虎林の花)

みづのはらるん山に土を積りあやめあはるる(虎林の花)

眼のまに(雲霧)降りかす(珠山土)うまつて(鳥也)動いてく

煙二つ山路に吹ける鳥(あま)ねもとの(雲土)いひかす

あま(鳥)の(人)を(さ)つた(ま)る(花)ね(は)の(鬼)動(う)つ(花)

山の向に(雲)湖(西湖)をうらうらしくし(富士)詠草)

一人(かく)き(ま)が(子)の(物)を(も)り(ま)る(ま)る(鳥)も(も)る(ま)る(ま)る

か(ま)り(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

山(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

梅(ま)の(木)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あの手はわたしの腰を纏て

あつてはわたしの腰を杖にまじり

た(ま)の(ま)り(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

わたしの(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

わたしは始終(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

あ(ま)の(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る(ま)る

夕三つくもりしるる山の空の細ねの家つましく(豆相旅行)

朝ひく出る山産したの松の舟切るつとくうちさき

山草花の冬花けいけいし木立のなまを道に送る(其指針) 大正九年

もろいまし傳野柑三つしなみち(其指針) (其指針)

山草花の家(ゆりくほまめさく)もろいまし(其指針)

まじりし海(左のうり引地)水底あさし砂のなみち(相模海)

松の肉の夕まじりし水鏡田の水の面ゆりし蛙鳴る

隠れ道のゆりまじりし水鏡田の水の面ゆりし松風の音

命たてて後作(土い)くすめしきか(世)しとほめむ(まじり) (まじり)

反鹿鳴く山のうらまゆりあひ月い出あそし三つ各まじり(其指針)

つむつむい地ゆりんほまじりつはまじり(まじり) (まじり)

海(まじり)のまじりん改地をまじり越えて磯の空法地へ潮流水をまじり(改法) 大正九年

凍みゆりし七地あつしまじりまじり(まじり) (まじり)

花のつる(連草)つるとまじりまじり(まじり) (まじり)

花あせままじりまじり(まじり) (まじり)

幾らあままじりまじり(まじり) (まじり)

夕まじりまじり(まじり) (まじり)

しつむなの上跡まじり(まじり) (まじり)

おもしろい雨まじり(まじり) (まじり)

わのまじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

たままじり(まじり) (まじり)

朝のまじり(まじり) (まじり)

わエー又さう(其指針)

わ長しの長あひ白い点布おしせ

わ長しの短のまじり(まじり) (まじり)

わ長しの短のまじり(まじり) (まじり)

わ長しは黒いネウタイをまじり

あつあつその短いままをまじり

客人まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

まじり(まじり) (まじり)

いかにいふ事をも言ふ事か立つる あり山の雲ふりけり 243

この朝の行く野道に時雨より一つはき了る 大おはれなり (代々木原)

月をらふ日は澄みながら北空のしつめる色は時雨をうらし

をいぢりけなくなれば山のけのり入る処に時雨りし (信濃に暮らす) 古正二年

春よけて雨の模様はあまのしづめは痛葉まらへ 咲きしけるかな (春よけて)

朝開きけり 雨をあふ合 飲木の香をいやく 花をゆりて吹く (朝まき)

檻に伏せ鳥けけいものも鳥をまらぬ 獅子の啼きまら声 (上野にて)

ふふふ 地震うちよりのまにまに 山をまら声 (鹿島歌)

大いの上流をきく 浮かぬ 来た人のまら声 (大正二年)

丘の上の 暖かし 銀舌の 未だく 秋くれをす

代々暢の 澄いのは 水は 雪欠けの 秋又いつい 上野の山 (晩秋)

大津波の 舟下り 大津波 舟をくし 舟をくし 舟をくし (大正二年)

さふふけて 月のまにまに 越ゆる 山の 生物の 寝しつ ましたらし (休暇を待つ時)

春あたま 園の 花火の ありて 雲色 旧い 立は 霧の 暮れ

わのしん ときば 黄ばり 山 暮れ なるを 見れば ありて ありて

去砲の 音の 鳴かた なるを 見れば ありて ありて (富士 裾野)

月夜の 光の しん 横はる 山 ありて ありて

八千草の 葉の 向か ありて ありて ありて

大津波の 舟下り 大津波 舟をくし 舟をくし (九十九 兎波)

大津波の 舟下り 大津波 舟をくし 舟をくし (大正 二年)

山内より 傾斜の 雪の 降りて ありて ありて (大正 二年)

雪の 降りて ありて ありて ありて (大正 二年)

雪の 降りて ありて ありて ありて (大正 二年)

世紀の 険しい 峠を

僕もらつて 心は 燃やして あります。

月夜の 雲は 虹色の 輪廓を もち

高くで 羊たちの 様は 啼きかき あります。

一死の 痲せむ せむ せむ せむ

あなた の 髪 の 毛を 撫で あります

僕は ありて 紅い 風車 で 長き ありて

フワフワ の また 下で 見 あります。

★

代を もつて いる まは 皮を つけて あります 蜜柑 があります

こゝろ と かりく ら あつた 一人 の シーソー の なく なつて あります

その 美し さで 僕 の 心 を こころ 人 に おき あります

★

あなた は まは 十八 の 子 供 あります

大人 染めた 思案 は 止し あります

あなた の その しな やん な 月 で

何う やい を 苦し み を 捨て あります

荷物 の 方が おろ あります

らの なつて あります あなた は 肩の ぬれ あります

★

西方の 黄なる 月を ありて ありて ありて (大正 二年)

秋又山 月を ありて ありて ありて (大正 二年)

雪の 降りて ありて ありて ありて (大正 二年)

朝はやくも雪は降りつづき来る本曾新道は冷き各道

雲動けはうくとまゆまの。させば石根南を言ふととめなくけり(名山早雪)

山をくらし山の本の石を山吹うり(とばらゆくま) (又てせせり)

三の二の雨ゆとししし夕ゆり水いかにのたうらくこけり(夏こそいそ)

昭和七年一月二十日 乙卯抄

あかあかとすすまぬ大あまきりはおさめ あまきり 鴉しはしはば あまきり 鳴きけりるなり

みはしはし仙せん 院いんととまらるゆよくわひるんりとをこふるも

しろうりゆいこらさく せん 院いんをわくしすもほつあたるなり

十二月十日 今又雪のハエエーのはじめある。

十二月十日

あなれの頭ひ了解すること

わかしは心臓しんざうひ しん 知らうとする

あなれか心臓しんざうひ しん 多くことを

わかしは しん 知らうとする。

★ 記憶

またけ長たましくわたしの中で、記憶の しん 知らう しん 知らう しん 知らう

わたしの しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

わたしの しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

可哀そうなわたしの記憶、あまのうすやせ しん 知らう しん 知らう しん 知らう

★

あまの流れる しん 知らう しん 知らう しん 知らう

あまの鏡乳石、あまの鳩穴

あまはわたしを しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

あま(よ)あま(よ) 月かけの下の懸河よ。

★

月老いてらさく しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

雪は必雪となす しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

こゝ風名のし しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう しん 知らう

ほくは女子の体温をわかつておつて来たり。

★

船は癒れて井戸の肉の程をおしと

飛立つて鳥

ササめ鳥

わんしはまじろあへんの雲か降るよと

甲州のわんしの髪いな木がおもる。

★

構橋いよとのおぼる

わんしん 喜らつたももる来りやせ

おあつしやひ△ — コッパには金突かきけおあち

十二月十七日

河々の薄氷も固まつた

犬を動かして海東青鶯は空のねん寝まじろ

昔の空のまじろの金冠をほくは包つた

おま一ッ歯ならひ — そのやうに園に境の山々はみつめさされ

★

春のこの公園ら梅がさすす

ほくの知るぬる囚人が赤あかこゆく

旦那もすこしたけ せの中を欠せせて下さし

頬の清水た子守女たさ世あのあままのあまま

★

ふ供たさけ喉のあくまひせこ耳をたさうたあ

聲雷冠んとしたる聲

ほくの心脈を鏡のちがひかホさまる

へつしへも眠つたころ一なる道に雨相おありける。

★

星切くはほくの影で流える

かたう指し示すは気持をか破綻か

ほくは流れる、夜気がたると一虎也。

しつみな夜にも迷ひつたちかほくの山とま

十二月十九日

舗道の旋風いらくゆる

街燈の円弧いらくゆる。

★

たのしく世のうちは大きなりまをうけれ

蝶々まあ毛虫あわ。

リボンは僕の喪章とをす。

★

秋本子は花を植えてみる

へんな花の咲き出すか知らしむい

ほくは指を立て、夕月すまむとする

秋本子はもう泣いてゐるのだ

★

本御通りを本とすつと着た女の子かゆく

眼苦直をまつ赤い泣き腫らして  
ほくはこねまのヒラを拾つておれ

★

天花は半時ばかり泣いておれ

弟の手はひどい雨相境だ

いんちゃん ~~おさかな~~

氷の木が甚不かとかこのうらむおれ

★

縄をひいておる女の子ら

こんで縄なんかといまはしな

逆立ちしておる幼子をほくは ~~おんちやつた~~

逆さまの顔でいそそぐせ

起る上るもいそそぐやま

いんさんの顔つたらあらはしなかつたわ

★

玻璃のなみの白の葉

紅と白と緑のむくむく

糸子 X マスの顔をやそえな

此子はマリア様を信仰しておる

~~おんちやつた~~  
子供くせ

十二日 三十一日

雨のばさささ ~~いんちゃん~~ 花の匂りをまろまろ

鏡のひびきはわたしの賤い金の匂をしらぬける



★ 留置湯

こぼい光の甲で浦を曇か對いなき  
光を待た受けて自ら光を放つ

★ 一向の寺

柳オウゴンの樹にわたしの幻ばかり  
さほこの花は此の術を測りあする  
縁の青も、松の空の青さ。

★

金牛宮の牝牛の瞳は怒つてゐる

この牝牛のせいせう

軋きにわたしは綱をかける

水晶珠をつまむ念珠、その下さ。

★

棕櫚の樹の傍にわたしの眼は塵ちりは塵ちり

牛をばじめこの目の光

キラキラと泉に溢れるは生命の水

棕櫚の樹にわたしは新ら感觸を加ふる。(パルテマイの話)

★

魚たちは全の材料をもつてゐる

けいせんちわたしの手は眼まなこは眼まなこ

わたしの綱網の穴を云使は繕ひたまふ

窓の外から星と光り

★

(空の星のぼかし)

十月二十三日 松浦常御 櫻のゆか 丸友と云

その朝報 わたしは食膳をたつた鶏子は落りのやうに紅かつた  
ゆか方わたしは隻脚をかくして運ばせ来た

わたしは隻脚 <sup>カ</sup>淋瀝と海アネモネの花を以てのりと確信して

★ 中華人女氏の失脚について

満洲國瀋陽省海甸縣人女氏を以ての <sup>カ</sup>ゆか方までわたしは彼、かま色の  
蛇を舐めんむし紅色の女刀を吐き出す鮮やかな術の場面を海盤車流  
のフロアトウの下で困睡をのびて欠まもつて来たのたつた。

夜半ゆき身の酒場花骨をきて来ると <sup>カ</sup>張外か来た。女氏の失脚について  
持たその欠出しで、わたしは <sup>カ</sup>然として <sup>カ</sup>煙い官をおとした。その境 <sup>カ</sup>始の官は  
凍つた長煉瓦の上で <sup>カ</sup>粉塵 <sup>カ</sup>わたしは不幸を生かしてはじめて感じ他人の如く  
踏踏とウラレーをへ叩いた。

気がつくとわたしは外衣のままアパートの自 <sup>カ</sup>床 <sup>カ</sup>ぬかつてゐる自分を見出した。

棒のやうにわたしの脚は痺れてゐた。 <sup>カ</sup>あつた <sup>カ</sup>陰 <sup>カ</sup>羞の <sup>カ</sup>ぬか <sup>カ</sup>わたしの脚を這うん  
相違ない。わたしは今更ぬ所の <sup>カ</sup>父母 <sup>カ</sup>さん <sup>カ</sup>信 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>欠 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>して <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>る <sup>カ</sup>こ <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>自 <sup>カ</sup>考 <sup>カ</sup>した。

水道の口かわたしの口許まで <sup>カ</sup>延 <sup>カ</sup>び <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>来 <sup>カ</sup>た。

わたしは <sup>カ</sup>部 <sup>カ</sup>屋 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>去 <sup>カ</sup>る。 <sup>カ</sup>靴 <sup>カ</sup>子 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>用 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>な <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>た。 <sup>カ</sup>その <sup>カ</sup>外 <sup>カ</sup>に <sup>カ</sup>何 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>異 <sup>カ</sup>事 <sup>カ</sup>か

あつた <sup>カ</sup>煙 <sup>カ</sup>管 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>わたしの <sup>カ</sup>口 <sup>カ</sup>許 <sup>カ</sup>まで <sup>カ</sup>延 <sup>カ</sup>び <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>来 <sup>カ</sup>た。 <sup>カ</sup>その <sup>カ</sup>外 <sup>カ</sup>に <sup>カ</sup>何 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>異 <sup>カ</sup>事 <sup>カ</sup>か

わたしはいつか <sup>カ</sup>御 <sup>カ</sup>涼 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>端 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>あ <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>た。 <sup>カ</sup>足 <sup>カ</sup>取 <sup>カ</sup>り <sup>カ</sup>は <sup>カ</sup>確 <sup>カ</sup>乎 <sup>カ</sup>た <sup>カ</sup>る <sup>カ</sup>もの <sup>カ</sup>あ <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>た。 <sup>カ</sup>既 <sup>カ</sup>氣 <sup>カ</sup>味

か <sup>カ</sup>掃 <sup>カ</sup>る <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>長 <sup>カ</sup> <sup>カ</sup>内 <sup>カ</sup>は <sup>カ</sup>よく <sup>カ</sup>晴 <sup>カ</sup>れ <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ヒ <sup>カ</sup>ル <sup>カ</sup>イ <sup>カ</sup>ニ <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>ち <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>其 <sup>カ</sup>慮 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>り <sup>カ</sup>懸 <sup>カ</sup>念 <sup>カ</sup>垂 <sup>カ</sup>して <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>る。 <sup>カ</sup>わたし <sup>カ</sup>は <sup>カ</sup>広

告 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>文字 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>讀 <sup>カ</sup>む <sup>カ</sup>入 <sup>カ</sup>大 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>本 <sup>カ</sup>字 <sup>カ</sup>第 <sup>カ</sup>四 <sup>カ</sup>萬 <sup>カ</sup>歳 <sup>カ</sup> <sup>カ</sup>危 <sup>カ</sup>し <sup>カ</sup>は <sup>カ</sup>ま <sup>カ</sup>た <sup>カ</sup>も <sup>カ</sup>煙 <sup>カ</sup>い <sup>カ</sup>管 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>り <sup>カ</sup>お <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>す

と <sup>カ</sup>こ <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>た。 <sup>カ</sup>大 <sup>カ</sup>の <sup>カ</sup>字 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>人 <sup>カ</sup>間 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>い。 <sup>カ</sup>そ <sup>カ</sup>こ <sup>カ</sup>ら <sup>カ</sup>大 <sup>カ</sup>氏 <sup>カ</sup>か <sup>カ</sup>帽 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>り <sup>カ</sup>お <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>す <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>る。 <sup>カ</sup>大 <sup>カ</sup>氏 <sup>カ</sup>の

帽 <sup>カ</sup>を <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>り <sup>カ</sup>お <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>す <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>る。 <sup>カ</sup>大 <sup>カ</sup>氏 <sup>カ</sup>は <sup>カ</sup>一 <sup>カ</sup>歩 <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>お <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>す <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>ゐ <sup>カ</sup>る。 <sup>カ</sup>氣 <sup>カ</sup>味 <sup>カ</sup>に <sup>カ</sup>觸 <sup>カ</sup>れ <sup>カ</sup>と <sup>カ</sup>思 <sup>カ</sup>つ <sup>カ</sup>て <sup>カ</sup>途 <sup>カ</sup>端



寒々として野良はつらけり遠睡ん山嵐めまろく土埃見ゆ

南天の 宜見はニ。寺に 数多し山嵐にゆれてしつごころなし

みすおかる信濃の雪の言ふるに枯井お田の何れのしめる

と気短ぬの田中克己のいそひの相手とまゆりあはれ者男は

北風に白いて かんはあゆみしな終なまことくうしろになん

ゆふふの 寒風いみてはまを枯木しを木の相をるかけり

毒黄なむ 枯木しいろの女使ふより わら 女使のさむしき時しるしと

(仙蔭波詠草)

★

空を云車の 駆けるまほかす

留風か何くの宿息を穴鞠む

死か 首至 碑の文字 さら 甦(る)頃也

★

穴を 漢也

枯野をゆく水

子を及よむ大

十二月の青葉

★

烈し風の中で

彼等はパンパンと空を鏡をうらめぬ

鳥たちは騒々しくおを格好で

杜野に陸ち 逃 けて了つた

あつし風の中をパンパンと鏡声かつたので

一月三日

鮮形に罹りし人、  
(Crucifixus)

1865

十字の本にその苦しき四肢をけられ

血を流して汚され、苦しめられぬ、

慈悲のこころなるに、純き心と

心よりしき ~~心よりしき~~ 清しき心

さるに自らさる 伎徳と称するもの

とを 青柳とるに 型どりの

寺院の暗い 闇をさる、

あるはまた 柳の野に 舞えぬ

かくて 純き眼の心 ありしは

わらわの 時しき ~~時しき~~ 起りぬ、

古き不ぬと 永に伝へ 傳へつ、

この 宿め ~~宿め~~ 走るま 走るま

思ひ出づるや (一八三七)

思ひ出づるや、わの 妻のうらみ、

わらわの 部屋 ~~の空のうらみ~~、

園を 嘔下 したりしとき、 秘めし ~~秘めし~~ ありけん、

十二月二十七日

雲が あり 街を おしつける

橋の上も 及ぶん だが 来る

氷雨に 青物が 凍り つかう。 | 大阪

十二月二十七日 人よ来た

しこつらん | 街 |

暗い 岸へん、 暗い 海へん

街は あり

雨物は 屋蓋を 重く 壓へつけ

静寂を 破る 海が 鳴る

單調に 街の まはり で

さわりく 木林も なければ、 五月

たえまなく 轉る 鳥も いない

渡り 鴉 鳥が さん 向に いる

秋の 夜も 鳴り つかう ばかり

山岸へんは 草が なく

けんわ かわか 心は ひとへん さまへん 倚る

海への 暗い 街よ、

若い 日の 影 鬼 ~~鬼~~ 惑 ~~惑~~ かい つまも

ほは えみ ながら さまへん 上へ 休ら ぶる から、

gedr. 1857

暗からん 素馨花と此の丁香花 舞うしを。

思ふはかれらににいろりて

なればいとし 確のうし、いそせは時ば遅し。

帆 しかしうあえ。

海邊 舟のこゑ

わが園の樹の梢のうらみ

たまかゆく 風をもしかしなつあま

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

証先らゐ (一八三七)

ふくもさつら 四十百五

四十はてれど 五十のはじり

はらゐるわが心許ん

おお 暗い海辺の暗い街よ。

一海辺一 一八五四

入海をいま 鴉はとひ

たそかれはははまつた

浦水た 洲の上

夕 霞か うつてゐる

灰色の鳥の影が

水を搏つとひ去り

鳥々はゆめのやうに

海雨降るの中は浮きあがる

わたしは泡立つ泥の

秘密ありけをこゑを聞くと

さしい鳥の叫び

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

いままれもわれらんまはらぐりまめ

もう一度風はそまぎ

それから 黙るしまふ

沖の方から 人声か

たんたん はつきりし

新しき朝の晴ちり

この清い土へひととては  
光をばわれりなくおぼるる

早も塚より風吹まぬ

秋つりの木犀草の香をもして

寝 覚め (一八二七)

虚しくゆめよりわれは  
雲産風なく夜ふかく

書 日はすまぬ、朝はほし

福子は影をうらしたり

ささくわかれ雲花の影を南く

うち書つこゑぬ、わがこころ懐し

無頼 (一八六四刊)

たのしみかまじき無頼であつた

俺は一人なんともない

外面如甘露、内面如夜叉  
歌、よれよれとんか

世奥のとき (一八五三刊)

お前は女樂椅子、わたしはおまの足もと  
頭をおまの手に向けて、坐つておれ  
しつみんの流れるを感ぜぬ  
わたしの間はよいよいかんち

一 子供たち (一八五三刊)

わたしの膝にはいま

わつちやな奴をのこめて

暗かりぬらわたしを

やましい眼でみつめてゐる

もう遊ばもしない、わたしの傍に

わたしのこゝも行なうとはしない

わつちやい魂は捨てた

わたしの中へ入らうとする

二 一八五三

わたしのエグエルマン、わたしの小僧

お前は家中の目先

おまの眼をみれば

鳥は二羽の子供たちは

三月

ans. der Marsch.

一八五三刊

左手は俺は其智の外道の

右手は俺は其智の外道の

王様の黄龍の外をまつまてゐるんが。

蔵言 (一八六八刊)

或者は曲か。うそなまら何うしれ

他の者は曲か。うそなまら何うしれ

奴隷との縁が分れる。

不幸より先づ

負債をとりのぞき。

忍耐んころうよ。

眞暗 (一八六五)

来よべきもの

なかに生けるは君をなれ

外つ國へおつよとし

なかに土はわか家を小

かたはなかにしを

未来の暗をえず。

牡牛は三月末の草を食

百姓の後へつて行そ

用立おおくを刈りはじめ

かまら冬に牛小屋で

緑の百十うときん

林はいまは清化さるはな

一四日一八五三

いま晴るあまのはあは

わたしの心を動かすは

聖書か地から上る来り

生人命はゆめのやうに

わたしの花や草や木のやうに

一四日一八六八刊

御用の、其あまはと

いやな毛虫おめつ

美しい世々を新す



一、  
墳かぶつの古ふるの石いしの倒たふれ

新あらたしき石いしはいま置おかぬ

石いしの影かげはしるも、その中なかにみえぬ人ひとの影かげ

南みなみの影かげはしるも、弱よわきはしる面おもて貌がらがまてゆくのが

棺かぶつの影かげはしるも、裏うらの布ぬいはしるも

花はなの環たまごは今いまくなくしぬてゐる

桃ももの枝えだの影かげは

白しろき紫むらさき花はなの環たまご

ぬる影かげはしるも、木きの影かげ

太陽たいやうの影かげはしるも、その影かげの中なかに

いまこゝ地ちの中なかで影かげの影かげ

五月ごごの影かげはしるも、毛けの影かげはしるも

石いしの影かげはしるも、

上うへにたの影かげはしるも、格か子ごの影かげはしるも

影かげの影かげはしるも、

影かげの影かげはしるも、

影かげの影かげはしるも、

世界せかいの影かげはしるも、

来きれと此こゝ遊あそばはるも 一八八一

夏なつの日の影かげはしるも、燕つばきの影かげはしるも

秋あきの影かげはしるも、吹ふきぬ、春はるの影かげはしるも

いま影かげはしるも、日ひの影かげはしるも

来きれと影かげはしるも、遊あそばはるも

石いしの影かげはしるも、玫ばいの影かげはしるも

影かげはしるも、花はなの影かげはしるも

あなしをな、夏なつの日の影かげはしるも、早はやの影かげはしるも

あなしをな、いまいて、白しろき影かげはしるも

一いつクリスマスの夜よ 一八五二

他たの影かげはしるも、街まちの影かげはしるも

子こ供ご達の影かげはしるも、こゝの影かげはしるも

そはばクリスマスの影かげはしるも、ひの影かげはしるも

子こ供ご達の影かげはしるも、市いち場の影かげはしるも

わなしは人ひとの影かげはしるも、推おしるも

しやか、影かげはしるも、声こゑの影かげはしるも

影かげはしるも、影かげはしるも

玩あそぶの影かげはしるも、来きれと影かげはしるも

白の夜のおぼろてま

唇色くはし さかといまばりそいからし

香々わたしの始あま

此の来こ悔あやまましこのれりかあ廻まわりく

すこあからあ ~~あ~~ ~~あ~~

も一度幸せも獲とりようの氣まなる

しじらううわたしは記わし「幸せとは何ぢ  
わたしはあ あ あ

今迄いまといやいのままま あ あ

承うけ取とりしつつ あ あ

さらうわたしは あ あ

今迄いまといやいのままま

さらうわたしは あ あ

もうわたしは あ あ

一いハら八はち形がた

眠いんあるは あ あ

カレシノ あ あ

醒ありし あ あ

まよくの あ あ

その あ あ

わたしはふつとして、街燈まちのりつあらいの

本ほんのあ あ あ

押おしな あ あ

大おいさ あ あ

そのあ あ あ

「ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

ああ あ あ

懐妊の精を産み、  
身を疲れさせ、  
身を可憐に、  
あゝ、  
鳥は可愛く、

懐妊の精を産み、  
身を疲れさせ、  
身を可憐に、  
あゝ、  
鳥は可愛く、

懐妊の精を産み、  
身を疲れさせ、  
身を可憐に、  
あゝ、  
鳥は可愛く、

懐妊の精を産み、  
身を疲れさせ、  
身を可憐に、  
あゝ、  
鳥は可愛く、

懐妊の精を産み、  
身を疲れさせ、  
身を可憐に、  
あゝ、  
鳥は可愛く、

X

曠野の虚女 (一八七九形)

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

わたしは基回馬で、早くお宿  
向うはあまをしく、雨と風の囁きをたてます。

一九三三年

一月一日 南口、白田山、六葉の丘

元日の中、空のものと、  
女々々とゆふ西空はく水やら、  
元日のゆふあけあまを、

元日のゆふあけあまを、  
死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

死にたやな

かたしはいつまでもたまふりまづ

いまは いまは 二 (一) 歌は行長の子せし

も夕 夕 も清えました

夜 夜 歌をしめこうし

何 何 も も を を かく かく どの どの 心 心

た た れ れ いた いた しの しの 難 難 儀 儀 を を は は り

本 本 林 林 は は 突 突 し し ま ま ち ち の の 心 心

道 道 も も 二 二 ころ ころ も も ち ち の の 心 心

丘 丘 は は 花 花 び び

木 木 草 草 は は 花 花 び び

暗 暗 い い と と 二 二 ころ ころ も も 暗 暗 いて いて あ あ る る .

### 廣野と歌へて (一五七)

廣 廣 野 野 を を 二 二 ころ ころ か か ち ち の の 心 心

地 地 の の 心 心 は は 清 清 い い と と 二 二 ころ ころ も も 清 清 い い ゃ や め

秋 秋 は は 木 木 の の 心 心 は は 清 清 い い

ま ま ち ち は は 二 二 ころ ころ も も 清 清 い い と と 二 二 ころ ころ も も 清 清 い い ゃ や め

清 清 い い と と 二 二 ころ ころ も も 清 清 い い ゃ や め

草 草 は は 思 思 っ っ 空 空 は は 思 思 っ っ

草 草 は は 思 思 っ っ 空 空 は は 思 思 っ っ

さ さ み み が が ち ち は は 二 二 の の 花 花 び び に に り り し し か か 丘 丘 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

山 山 の の 上 上 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

或 或 し し 東 東 の の 山 山 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

岬 岬 の の 飛 飛 鳥 鳥 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

い い と と 来 来 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

少 少 年 年 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

鳥 鳥 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

も も ろ ろ と と も も の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

か か も も の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

は は り り け け も も ち ち の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

い い と と 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

又 又 来 来 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

い い と と 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

あ あ ら ら の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

あ あ ら ら の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

あ あ ら ら の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

あ あ ら ら の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

一 一 月 月 三 三 日

坪 坪 井 井 明 明 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

カ カ ア ア ネ ネ ー ー シ シ ョ ョ レ レ ヤ ヤ ス ス イ イ ト ト ピ ピー の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

大 大 正 正 明 明 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心 は は 二 二 の の 心 心

ここを互向いゆまじと  
生と心と一すぢて思しし下。  
なみりせば。

誰いとも無しに思つて又たの  
俤の思の情を憂うためん

一月四日

思怖

熱帯林に夜吼える虎の響々たる眼より  
甘風涙のしみ立ちたる山の土に宿りしはたる  
思怖しそものいま来たり。

祭の夜の灯のもてる明るき、夜深く死つたはかとなき  
思怖しそものいま来たり。

北方の大星達の墜つ時、大穴の毛布の如く星をきざられ

無花果のこじん々の黒み、寂みて死ぬる時。

その時下りも思怖しそときは来たり。

バヒロンの権威尚き立す王の一言もちる人、  
思怖しそときは来たり。

並ぶる巨の女のつれをわしの居えわと眼のまはす。

黄昏の王が物もてる手、  
思怖しそときは来たり。

いまわの心と待つあたるその思怖しそときは来たり。

女、神たの、  
思怖しそときは来たり。

とよその思、  
思怖しそときは来たり。

白癩の瘡病の如くふるまふもなき、  
思怖しそときは来たり。

こつくわの肌膚の跡つけて。  
思怖しそときは来たり。

思怖しそときは来たり。

思怖しそときは来たり。

田舎

父になるかも知れないこの田舎が太郎をやる(上うしち  
母)なるかも知れないこの田舎が花子をおく(上うしち

かうさめめつたはあれゆえと 太郎は咳く

おれさめめつたはあれゆえと ~~花子~~ 花子 ~~知ん~~ 知ん

おれの血が おまへに生きたる

あなたのお血がわかれしに生きたる

二十年前、おれは子をもつ

十六でわかれしは子をもて

世向は何といふのだらう)

世向はひいしくまゐりてせ)

あつめめつたはあれゆえと

あつめめつたはあれゆえと

おれの父たぢもまうたつた

わたしの母たぢもまうたつた

父たぢか、まゐりて

母たぢか、まゐりて

その人々なるかも知れないこの田舎が太郎をやる(上うしち

その母になるかも知れないこの田舎が花子をおく(上うしち

一月五日

一月、尻尾は内をまはす

壇血に似たものが行人の涙を込め

噴き水に濁してゐる虫達か溺れ、現はは集る混乱を極めた

★

月の中より墜とて来た 鍊金術士 — 街の煙管の秘密をうらむる  
義務の観念に俺は乳鉢を割る。録音をして。  
一、度みの放蕩に俺の大地はめいって来た。

啊訥。

★

毒酒は俺の身を浸す、燻けく疼痛が臓腑を穿つ  
俺の吐瀉物は菊の花のやみ寝する。

見入るゝ地獄はまぢまに来る。

劔闘をいふ。殺害のうらみ。俺の神経はまぢ効くのか

要廣め、妻子血を地にする。P子モネより紅い花を咲かす

女は呵々笑つてゐる。畜生、愛つたな、鍔鏡で。

緑糸の浮いた面が見たや、臓腑を喉から俺は吐く。

一月七  
八

わたしを軸として、日か傾けは月か騰つて来た

灰より細いわたしの情緒に加はるゆゑか

また「邪鬼の時刻」か来た。

わたしの犯気はとめどない 面帳をはらふ風を吹く

リム  
飾紐の花は亡びた

理性の縄でくくつた。鳥達があめく

灰色の雲点をのど木路。

飾紐の花はさいは

★

一四九。

情は愛なり

他は情なり

★

あつらひの時い泣きかえをまてたあなれつ

不信も僕はまきのませう

僕は思ひきつす ~~戀~~ 語いひです

僕はあなたを哥りてあなたへの唇をまじし

馬鹿な母おめてその場いはい入

あなたと僕の遊戯は破れまし

あなたへの不信のすす泣きゆえん

★

いんな叱責いも僕は耐えよ

あなたと僕の肉を(こ)くゆくを

たけいその自由を奪ふいんな者へも

僕は凡ゆる譏訥をつくしてやる

あつらひの疑い醜い <sup>年</sup> 破つた老つた女の

あいつの君の再執事(一)なれは

僕はあつらひの存在を言ました位だ

★

あなたへの匿者の女なり



あなた Yungfrau Kintchen 42 査拾 され

取しらすわ、大方今よさつ眼鏡をしめて

おれお若らうに口唇の濃い奴たう

あなたよりおつ母エしかいぬいっつたと

富貴語りにおつ母さんいふちう

★  
宮之んウエヌスの足かゝる

今度も大抵おまゐれ

室の娘と母かゝる

また縁談の話

いつになつたら姑かと説きおとされる

ウエヌスウエヌ

おまゝかゝるのつわんしはおつ母さんのまじまじおまげ

わんしの噂ちう一刻も早くいとくわ

はらばり思まうまし

淋しい彼奴の床も照らしませよ

★ 不信

柿の榎の<sup>おま</sup>庭に<sup>おま</sup>飛ううう4羽夜もものさほすけ

花咲かむ春木を劫とばろばるときめ<sup>いひ</sup>言ひし<sup>いひ</sup>まかあすれし

言こわきまみま母<sup>おま</sup>兼刀<sup>おま</sup>自い<sup>おま</sup>まもこの<sup>おま</sup>あ<sup>おま</sup>止めと<sup>おま</sup>き<sup>おま</sup>やくとくかめ

★

夕一終は<sup>おま</sup>澤<sup>おま</sup>より<sup>おま</sup>立<sup>おま</sup>す<sup>おま</sup>昇<sup>おま</sup>る

冷くも寺院の楯もとよ  
わたしはおまへを思ふのみ  
あつゆふしあつたねのこころごと  
まの骨つたの跡内せむ  
一ツ討鍊の時い外ならなれど  
知らぬのちわたしは馬鹿ぢや  
れはは、家さらたると  
油汗をながして成就の内をくころ  
耳あゆましたつ長ゆるよ  
愚のらくらし待たゆるよ

★

いまは神や佛をもたのまじ  
三日月の罪を犯したるしんも  
神や佛は大しん  
君の母はは、説くをばつたたら  
あぢ人固の母は  
心家の骨ととしん 何と醜いこと

十一  
b

Y  
このり 吹かせ眼を待たり  
父一打叩けなこを涙と涙

十三の 丸園尻うまのい、アレンシユの 同人たらんことを求め来る  
十五の 肥下と証社一

雪 田舎之助 印を 訪ふ 豊郷の 怨情 洞ひまし  
父一手紙書く

★ 正月寺

冬空に 紅き 満月 去りしは 蛇屋の 蛇とを 眠おぼひさめし  
みきはたの 青面 金剛の 燈あかりもしらぬ 凍こつし 鈴ん 灯籠 うちして

★

雪か北から南へ 動りて  
雪間で 堅立 突うかまこえり  
退屈な ニューズん 退屈する。

★

遊んでゆく 雪うたで  
鳥か一羽 迷つてゆく  
大つん ぬか力して 羽搏して  
堅琴の 聞えり ~~日暮れ 杖をき~~

★

雪の 糸の 垂れ下る  
鳥は 空を くしくし つけられぬ  
地面は 堅く 凍こつて  
鳥の 隊と 怪俄 するから

十九日

此の 松了。 昔 彦登 記 事 解 抄  
大 師 には 彦 登 記 事 抄 ありし。

起 訴 せしむる。

雪の花片をまきちらすミニニス七ウ

彼女等の雪衣は実に白い

彼女等のスカートから青いリボンがはえてゐる。

★

嘆きいする海の人魚

アネモネを散らす風

月に魚達は懐胎する

★

いととは胸を迫めらん 根棒を以てへんぐしス連をぶひ拂つた。 噴泉をもつた  
庭園に火の子がほちほち 散らしてゐる。 格子にかゝる <sup>アネモネ</sup> 花のしやが。 いととは  
いつも根棒をもつてこのやはなぬ。 死人の面にはうらくをぬれよ。

一月二十九日 コキト一〇号出来

中の方の仕らしいくわいん 電事は事端のつにわたをちらして  
轆轤と構ぬん入つて事だ。 わたしの心臓がいくつもの前面に  
飛びかゝるにやぬ。 夕方のいそがしい町に

★

いととは樹皮へよそはし <sup>スチ</sup> 杖をたえ。 樹皮へよそはしををつけてゐる。  
わたしは物欲のなかれ <sup>面</sup> を垂れて 埃色の外套をきてゐる。

いととはわたしいつきあつて 才をほんわかにゆく。 ああそのまをほろの

短帳下。

一月二十日

こゝの歌

雨のよるよるまよと鳥わかのミミろは おやあまよ

甘棠	蘋	薇	蕨	草蟲	藜	鳩(百南)	鵲(百南)	鹿	鳥	華	楚(王)	草	兔	桃(百南)	蘇	葛(同)	黃鳥(白)	老耳	馬(同南)	葛(同)	羊(王)	鼠(百南)	芥(王)
鴻	烏	苓	榛	虎	狐(百南)	非	雁	雉(王)	燕(王)	蓬	漆	梓	桐	栲	栗	鷄	麥(王)	唐	象	鹿	雞	稷	黍(王)
木似	松	楡	菀	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚

麻 艾 蒿 推 牛 雞 稷 黍(王)

一月二十日 マダム・テラレエの会

北園克衛、政中、越部、知らぬといふ、知らぬといふ、知らぬといふ、知らぬといふ、

誰も死のヒロメをいふばしな。 僕、詩もこゝろない。  
 凍てつた心臓、いあの空、ささる。  
 雨の中へ、雪、割ち。  
 大ぢまふ、四思は、紫色の、かほりです。

★ 大砲が、攻め砲か。  
 ★ 聖、空、いんこも、憎らと、ぬらぬ。  
 ★ 肥下は、け、妹の、こも、を、も、え、る。 僕、は、思、い、お、す、む、し、の、こ、も、を。

あはれ、こゝろ、みる、みやや、せ、あ、や、南、その、空、の、朱、ほ、こ、こ、か  
 雪の降る、身、にあ、ら、わ、い、山、寺、鏡、ま、つ、お、ん、の、く、あ、る  
 誰、を、や、上、志、中、急、身、を、ほ、ほ、す、と、ほ、ほ、す、こ、も、し、て、く、た、や  
 くる、か、く、か、と、様、待、ち、お、て、雪、の、野、ま、を、た、か、か、す、ま、  
 け、た、の、雪、ま、り、と、さ、(ゆ、か、か、は、か、み、の、あ、と、ば、り、  
 雪、野、ま、り、を、り、河、の、蓋、の、な、ん、と、あ、は、か、か、わ、か、お、れ、  
 雪、の、降、り、は、今、筆、は、な、も、さ、す、こ、の、な、を、け、つ、  
 (仙藏院園吟集)

一夜の時計は鐘かねをまいてゐる

鐘の響きにはおかしな外ぬ

思ふらしいと遠の鐘まうし

鐘は洪然と身をおこす。鐘の傳に大木かのしか、こゝろ

一鐘の響きも知れぬ

果の光が一筋の即穴かう今こゝろのたう

★ ソアレ

スオートロイヤ桜草や鈴意は工へん倚らむやみ

花屋の店には呼吸するものを飾る

わかしは下をふくつてゐる。ふくの響きは止さし

玲れいりりととわかしの思の惟よ

こん夜かやは体らんかやすみ

土道の風の音。るる事のいなき

★

鐘は天井裏に疎らゐる。風の夜。歌を思ふ

鐘によくひたあり。眼たちはむくつて。溶け去る。つた

かゝるの義つた眼めをみくつてはおまり

去るものは息をいし

★

彼等は脈を感てゐる

尚断ちの叫びと地を擡つま

その場外で鐘は排風する

鐘はとも木を食つてゐるのた

★

リウの花 賣うは白の建物のなかで待つ休せしめぬ  
風の吹く街角で (急な風が来るところで)

リウの花をなみみせておれ

わたしは佛蘭西語の辞引の紅い革を好んでゐる

リウの花堂は美しい お寺辞しんくちを位に

長いわたしの膝をみろと畏れないうつ花の白うふ

★

雨か木のあひまに 江戸の三層をかむ(る)

わたしとちと生活と

酒池自然をわたしはちほかふ

わたしとちの生活のちのち

雨か木はとち休ない

★

頂の板の雪か枯かうおさる

花咲く春のしん

花咲く木々の指さる

花 花の後から空石が出る

一月二十三日のまうは Y と二週内はとちうん合ふ

お菓子のやうなうかる。それのやうな子

いふ。受ける。いふ。

一月二十八日

つとト 相野

一月二十九日 Yと君 唐平川

枯草の舞の羽衣の旗

遠い對岸は冬の雨段

白い礎の寒々とした悪念

★

奴等は砂利を掘り上げてゐた

奴等は俺と俺のやせを侮辱した

奴等の頬はむさくさしい

奴等の臘味嚙は固陋である

奴等の俺と俺のやせは骨(る)

★

や女の髪をふく風は草の葉を扇非かし

儂れはひそひそ話の鳥の歌をまじる

陽は松の向いながらおんらは死陰にある

時(時)のおひつるやせをしまじかこめ抱き

この時の流れるにひそひそたぬ物厚を感じてゐた

★

多唐平川にさうす手紙りさうさうい何のこの子のこころはさしき

★

黄金の髪 黄金の陽

鳥羽玉の髪 ~~鳥羽玉の目~~

一月三十一日

Yと君 手紙  
のおとこらし



二月四日 身神困憊

あち船通の利く奴が世界にえ満し  
知りしなれそいつらと得々と喋り  
他人の向違つた知縁をなげきし  
獨り自うを高くして

とれ同志語りある、言ふに故令して

腹の中いりし悪ををなげきしめ

下駟の音か流えよと内には雑言す

藝術の、矢槍のとわ中めらむ吐く

青影此をそりたこの田か女の子あつたあつと

煙草の脂くさう口かうほさく

昨り三色旗をつけてる女奴か

今言はるゝ思ふ襦衣売して

まじまじして拵拵に困るころころと

投獄しよともしめし、何のサアアか

砲々の口は百軒長屋に向けられ

コロアリスの、西口はフルシッパへ向けられ

継ぎのちたつた襦衣の中権威しかよる

北風も法権した大建業のちに向きあつる

融通の利なる奴はかせてけまらねをとして

お腹でし痛あかぬ南あかぬ、そつと

叔母は先理的以外の娘はもたぬのち

仁母以外の苗木い何の信用かおけ

背廣しネクタイも体中広告とらぬ奴

大道を歩くとと潤米する

早く行き方お水は、広生。意味を尋ねぬ

無神台車良いは、~~お水~~お水かまむ、お水おしこるなり

まはし一つも、万うとさむら

頭取りの甘き居い出る、お水人お口上るお

ちんせ夫し、お甘き居ぬ

上所是の仕事を、後々、お水お水

心麻の熱くえな、~~お水~~お水お水

さうしたしんも、かきめらるるお

### 金田一氏と愛女

北方の美の國人よ、すまはれ生命の草鞋よ

おま一繩紋の衣を三着て、永遠の太陽を言々

白垂の殿臺に、悪魔鬼つ徳の如くやるま

おま一の唇の、照望に、俺は羞恥を感じ

おま一の白い髪に、俺は恐怖を感

銅色の、おまのおま一の周囲へと、ま

おまは、~~お水~~お水、流る中を泳ぐ、~~お水~~お水

お水、~~お水~~お水

★

傷りぬ鹿は心麻の、お水から、お水を流して

白水のほとりま、くるとおつく、四足と、お水お水

片栗の薄皮の花うあたらん彼は口をこけて  
音もたてずい水そのむこめくりとつんがうた

~~山~~ ~~角~~ 菊の牙のやうにれうあして

彼はもし身いさしな、滴る血は地面をつたて

泉の方へ流るんてゆく、白水と、白水に流るるゝあま鹿の頭を

赤くそめるのもし、直ぐに、精は、鹿の皮の紋を

陽の煙うり灰りしてぬる、まらた

# Heinrich Heine

von Hartwig Jeps (1806-13)

Heinrich (原の名 Harry) Heine は佛蘭西軍駐屯地のトリエウラウ地方に生れた。トリエウラウ (Düsseldorf) の猶太人の家。父は Samson Heine. 商人である。

幼少時から印象力と想像力に富み、<sup>nervös</sup> 神経質で Heine の精神的・肉体的の構造は家系と ~~nervös~~ ちる佛蘭西の批評家の流を ~~24~~ <sup>24</sup> *écorché* で生れたのである。

父 S. Heine は Cumberland 侯の司糧官 (Proviandmeister) たる chevaleresk な傾向を持つ気風を崇奉する性格であった。

„Eine grenzenlose Lebenslust war ein Hauptzug im Charakter meines Vaters, er war genußsüchtig, frohsinnig, rosenlaunig. In seinem Gemüt war beständig Kirnes. (Memoiren)“

母は之を知る rationalistisch なる由り Heine に早くして一定の方針をもちしむ。之は其子の性格を認めず母の態度の方向に依りし。

Sie hatte... eine Angst vor Poesie, entriß mir jeden Roman, den sie in meinen Händen fand, erlaubte mir keinen Besuch des Schauspiels, versagte mir alle Teilnahme an Volksspielen, überwachte meinen Umgang, schalte die Mägde, welche in meiner Gegenwart Gespenstergeschichten erzählten, kurz, sie tat alles

mögliche, um Aberglauben und Poesie von mir zu entfernen. (Memoiren).

この空想の在りたるを排して此の悟性を修めんとす。子供の時より。哲学者の著述をよみしむ。

Heine 自身は父の如く多く此の世の事を知る Sinn für das Phantastische und die Romantik は Ammenmärchen の Sagen, Volksliedern 等加へて力教の<sup>心</sup>習に在りて居りしなり。

**学校** Harry は母の意を遂げ etwas werden せんとす。然るに Napoleon と フランス 七人の英雄に慕はれし。拿破崙は二十一人を南征したる二十一人一般の言を慕ふて居りしなり。人の子の母、人の子に言ふことなかりし。併し拿破崙没落後 Heine は Rothschild 王の如く富を以てて居りし。母の意向に背りて居りし。

与林の時 Heine は大に教習を受て居りし。十二才の時 Heine は Privatschulen の教育を受けた後 (vgl. "Citronia" in der "Nachlese") Alstedtdorfer Lyzeum (古典中学校) に入學せし。この学校は當時佛一人の経営にありし。然るに Heine は此の學校を退行せしむ。Heine は此の學校を退行せしむ。此の學校は當時佛一人の経営にありし。然るに Heine は此の學校を退行せしむ。此の學校は當時佛一人の経営にありし。然るに Heine は此の學校を退行せしむ。

Heine は 20 歳の初年にして、相手を 2 人執行人の如く Seferchen とす。又母 Gochin は 90 歳の Heine に Hexenkünste と 4 冊の詩集を以てて居りし。

Ich küßte sie nicht bloß aus zärtlicher Neigung, sondern auch ~~aus~~<sup>aus</sup> Hohn gegen die alte Gesellschaft und alle ihre dunklen Vorurteile. (Memoiren)

Friedr Heine 1815年 Frankfurt の銀行員也。 (後へ→)

Henri Heine

par Pierre-Gauthier

Heine はこの 悲しい 一冊の 序文に 書いた 「私の 先祖は 猶太教 に入信した。 私は 此の 自身を 誇りに 思ふ」と。 しかし Alexandre Weill によれば 彼の 先祖は famulus だ 彼らの 誇りに 思ふ べきでは ない。 であるが <sup>彼は</sup> Souvenirs intimes de Henri Heine という 題の 馬鹿な 伝記 以下に 若干の 趣意を 示した。 ~~その~~ 独自の 貴族的 猶太 集の 第一 巻に 家系 図を 示した。

Henri Heine 1

これは 貴族的 猶太 家系 図の 第一 巻に 掲載 された 無名 である。

x

Idarover <sup>は</sup>

18世紀の中頃 猶太人の一族、Heine 家の 移住 した。 Heymann Heine と Meyer Simon Proppert の 娘 とか Altona の <sup>町</sup> 住み たる 二人の 息子 と 二人の 娘の 先祖 である。 長男 Isaac は Bordeaux へ 出て 行った。 幼少 時、三男 Salomon は Hambourg の 裕福な 銀行を 設立し、又

Paris の la banque Armand-Michel Heine の maison-mère である。 二人の 娘と 其の 娘 達か Heine の 運命の 大転 折を 成す こと がある。

Isaac と Salomon の 間には Samson が 出来、裕福な 銀行員 として 活躍 した。 世間 圖の ために 1764年 には Idarover の 藩に 入った。

24の Idewri Idene の父下。了。

Idene は二の公家頼家<sup>字</sup>の御用高人の内蔵を引成りし治管子<sup>字</sup>の娘也。其の  
「赤い物服、粉を付た髪、白髪つねに打つら、~~花~~花<sup>字</sup>の髪、の髪をひき  
及<sup>字</sup>花<sup>字</sup>」

ゆきこひしわれもこ  
ひてたなかとりひこの  
家の住かしこことせ